

42255

教科書文庫

4
810
42-1928
2000301846

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

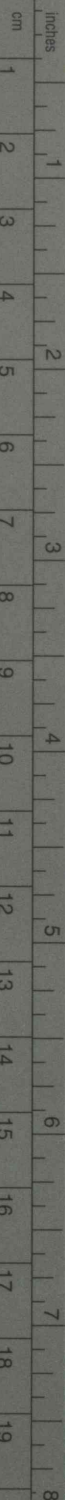


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Toll
資料室

新制
女子國語讀本
第二修正版
卷五



資料室

375.9
To 11

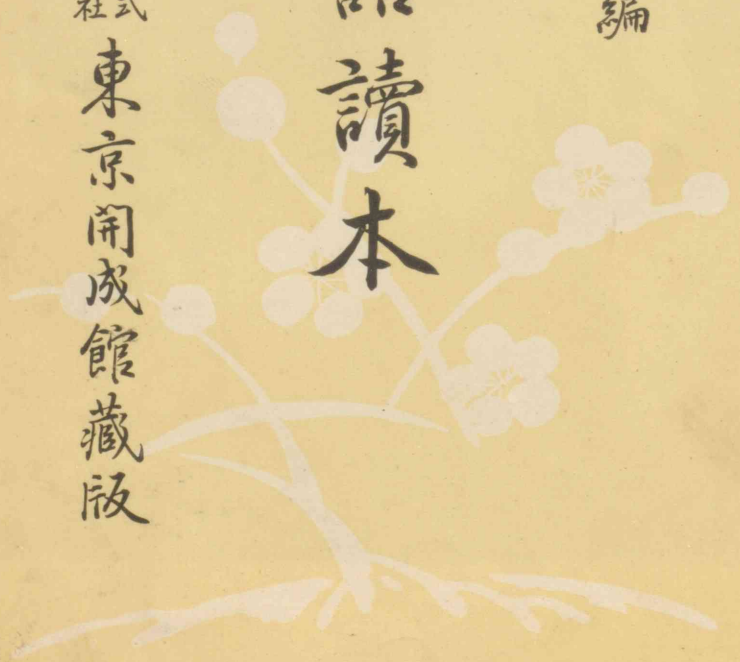
文部省檢定
高等女子學校國語科用
昭和三年一月二十四日

改

東京開成館編輯所編

新制
女子國語讀本

株式會社
東京開成館藏版





嵐山渡月橋

嵐山渡月橋

嵐山渡月橋

嵐山渡月橋



新制女子國語讀本 第二修正版 卷五

目次

一	春と少女	中村孝也	一
二	櫻の日本	佐々政一	三
三	春の關東平野(自修文)	近松秋江	三
四	山莊雜記	荻原井泉水	七
五	五月の太陽(詩)	萬造寺齊	三〇
六	ライン河とドイツ國民	(傳説のライン)	三三
七	萬國オリンピック大會に出場して	人見絹枝	六

目次

八	テニス(詩).....	柳澤健	八
九	若さ.....	高村光太郎	九
一〇	小泉先生(自修文).....	厨川白村	一〇
二	女質の絶対維持.....	(女性日本人)	二
三	新時代の修養.....	杉森孝次郎	三
三	伊勢志摩の海.....	田山花袋	三
一四	安乗の稚兒(詩).....	伊良子清白	一四
一五	東海道中膝栗毛(自修文).....	十返舎一九	一五
一六	静寛院宮.....	樹下快淳	一六
一七	信仰.....	釋宗演	一七
一八	言葉の味.....	五十嵐力	一八

一九	風鈴.....	大谷繞石	一九
二〇	田舎の夏(詩).....	川路柳虹	二〇
二	茅が崎から(口語書簡文).....	美濃部多美子	二
三	應仁の暗雲.....	(歴史小品血煙)	三
三	阿新丸.....	(太平記)	三
二四	現代俳句抄(俳句).....		二四
二五	我が父母.....	新井白石	二五
二六	思出の一節(自修文).....	三角錫子	二六
二七	細川忠興の北の方.....	湯淺常山	二七
二八	現代女流の和歌(和歌).....		二八
二九	良寛の遺蹟.....	相馬御風	二九

一 留守中に來りし人の許に(候文)……………樋口一葉…一五

二 狂歌(狂歌)……………二五

三 一萬と箱王……………(曾我物語)…二五

四 京都の秋……………水谷まさを…二五

五 春日局(自修文)……………福地櫻痴…二五



新制女子國語讀本

第二修正版

卷五

一 春と少女

中村孝也

少女といへば春を思ひ、春といへば少女を思ふ。春が少女であるか、少女が春であるか。萌え出る若芽、かげろふ野邊、うらくと立ち昇る絲遊、春の姿は一として少女の面影でないものはない。春光が四海に溢れる時、少女の胸に限りのない歡喜が湧くのは、少しも怪しむべきでない。

春の歡喜は希望にある。日は麗かに照り映えて、仰ぎ見る空のあなたに、そこともなく揺曳する光の華やかさよ。それは少女の胸に波立たせる美しい夢の世界である。少女よ、夢みよ。夢こそは

中村孝也
群馬縣の人、
明治十八年、
生、文學博士、
東京帝國大學
史料編纂官、
東京帝國大學
助教授。

純眞の生活である。この生活にあこがれることを希望といふのである。希望は大なる歡喜である。春と少女はともにこの大なる歡喜の裡に生存するものである。



中村孝也

春の歡喜はまた平和にある。描いた黛のやうに霞み渡る遠山のたゞずまひを見よ。朧な月の光を浮べて囁きかはず大海原の静けさを聴け。それは眠つてゐる少女の柔い鼓動にも似て、譬へやうもない平和に満ちてゐる。いかに柔かな大天地の鼓動よ。いかに悦ばしい少女の平和よ。少女の存在は自然を美化し人生を淨化する。少女の往くところ、春風がおのづと薫り満ちて、平和の光が世に遍くあらゆるものは幸福の歡喜に酔はされる。

三

中村孝也

中村孝也自署

若い生命の流れ流れるところ、自然に現れては春となり、人生に現れては少女となる。春と少女は等しく若い生命の顯現である。中村孝也自署から、そこにはいづれも輝かしい希望と悦ばしい平和とがあり、そして、その希望と平和の底には、測り知られぬ愛の清泉が絶えず滾滾と湧いて出てゐる。春は愛の體現であり、少女は愛の權化である。この愛のあるがためにだけ生命の流は永久に若い。若く、美しく、希望に輝いてゐる少女の上に、神と人の祝福の豊かであることを祈つて止まない。

二 櫻の日本

佐々政一

花見といふことが年中行事の一つとなつて、老幼男女貴賤貧富打連れて花下に遊ぶ風俗は、西洋にも支那にもなく、全く日本獨特の

佐々政一 號は醒雪、京國文學博士、東京大學教授、大正六年卒、年四十六。

ものである。

蓋し世界には日本の櫻のやうな派手やかな花もなく、また日本人ほど花の好きな國民もあるまい。支那の桃李は専らその詩人に



一 政々佐

歡ばれ、西洋の薔薇や草花は主としてその上流社會に玩ばれる。ところが日本では、花盛りの樽には、その日暮らしの貧乏人でさへ浮かされるのである。朝日に匂ふ山櫻のやうな大和心は、畢竟その間から生れ

朝日に匂ふ
敷島の大和
を人とはば朝
日に匂ふ山櫻
花。(本居宣
長)

て來たのであらう。和歌は、千年の昔から、何よりも月花を好題目としてこれを詠じた。人類がまだ野蠻の域を脱しない時代に、我が大和民族だけは、既に櫻花の美にあこがれる風流心を持つてゐた。さりながら、遠い日

本の上代には、まだ今日のやうには、到る處に櫻が繁つてゐなかつたに相違ない。

青丹よし奈良の都は咲く花の

匂ふが如く今盛りなり。

と歌はれた奈良の都こそは、名にし負ふ八重櫻も追ひ／＼に植ゑられたことであらうが、それにしても、山城の新都のやうに、

見渡せば柳櫻をこきまぜて、

都ぞ春の錦なりける。

といふほどの美しい都ではなかつたであらう。殊に花の名所として日本隨一の名のある吉野山にさへ、奈良朝時代にはまだ櫻は一向なかつたらしい。吉野の歌は數へきれぬほど萬葉集に見えてゐるが、たゞ山川の美しい景色を反復してゐるだけで、とんと櫻は歌つてない。日本が櫻の國となつたのは、蓋し平安遷都以後の

青丹よし
小野老の歌、
萬葉集にあ
る。

見渡せば
素性法師の
歌、古今集に
ある。



見花の酬醒

ことであらう。

世の中に絶えて櫻のなかりせば、
春のころは長閑けからまし。

と、業平朝臣の詠じた頃、即ち平安朝の初期が、花見といふ風俗の始めて盛になつた時代であらう。今日も櫻狩明日も花見の宴と打續いた春の賑はしさ、なかなかに心長閑かに暮らす日もないといふのは、最もよく花時の盛況を偲ばせる。

いつまでか野邊に心の憧れん、
花し散らずば千世も経ぬべし。

愛惜の心にひかれて、暮れるのも知らずに花の蔭にさまよふ様を歌つた歌は、眞

世の中に古今集にある。

業平 在原氏、阿保親王の第五子、歌人、元慶四年(西暦八五〇)卒、年五十六。

いつまでか素性法師の歌、古今集にある。



(筆州櫻原野)

にその數が知られぬほどである。まして咲くのを待ち散るのを惜しんだ歌は、指を屈するに違がない。

一朝厭離の心を起して佛門に歸依して

花にそむ心のいかで残りけん、

棄て果ててきと思ふ我が身に。

と西行は自ら怪しんでゐる。花にひかれる心は遁世の僧にも残つてゐたのである。

また、吹く風をなこそその關と、と詠じた源義家や、花や今宵の主人ならまし、と歌つた平忠度は、武士ながら花を愛づる心を

花にそむ千載集にある。

西行

俗名は佐藤清、鎌倉時代の歌僧、建久元年(西暦一一八〇)歿、年七十三。

吹く風を

その關と思へども道もせに散る山櫻かな。(千載集)

花や今宵の行きくれば木の下かげを宿とせば花や今宵の主人ならまし。(平家物語)

失はなかつた。源平以後の戦亂の世にも、平清盛は西八條に花見の宴を張つた。吉野朝騷擾の際でさへ、田舎者は花の下に集つて酒をのみ歌を作つたと兼好は記してゐる。況や足利時代の小康に遭つて、花見の盛であつたことは、謡曲や狂言によつてさへ歴々と知ることが出来る。かうして、あの潤達な太閤の醍醐の花見といふ前後無比の大觀櫻會が開かれたのである。平安朝の花見風俗も、鎌倉室町のそれも、さして懸隔があつたとは思はれぬ。時としては邸内の花見もあつたが、大方は野山に出て、花の下に筵を設け、辨當を開いて、終日遊興に耽つたのである。それも多くは主のない花で、

* 見てのみや人に語らん櫻花、

手ごとに折りて家苞にせん。

と歌はれた通り、或は小さい枝を冠にかざし、或は大きい枝を手折

兼好 吉田氏、本姓は卜部、鎌倉時代、文治五年(一一九三)卒、年六十八。花の下に云々の記事は徒然草にある。太閤 豊臣秀吉。醍醐の花見 慶長三年(一六二二)秀吉は山城國醍醐三寶院で一代の豪華を極めた花見をした。

つて歸ることもあつた。でも、花を折ることを惜しんだ歌も甚だ古くからある。

* 折り取らば惜しげにもあるか櫻花、

いざ宿かりて散るまでは見ん。

近世、徳川期に入つては、久しい昌平につれて、花見は愈盛であつたが、その初は頗る殺風景なものであつた。足利期の末には、鎗を擔いだお伴を連れて、花見に出ることがあつたと見える。流石に戦國武士は、花見にも武備を怠らぬやう心掛けてゐた。ところが、泰平な徳川期になつても、なほ寛文の頃までは、小身者さへ、花見といへば、わざ／＼槍持、鐵砲持などを従へて出たやうで、武器を携へて威風堂々とし、かつめらしく練り出す花見は、今日から思へば、随分無風流極まるものであつた。けれども、こんな風俗は久しくは續かなかつた。やがて御大身も

折り取らば、讀人知らず、古今集にある。

寛文 後西・靈元兩天皇の年號。(一七一三—一七二五)

草履取を従へただけで、槍や鐵砲は花の山には見られぬやうになつた。これに代つたのが花見小袖の伊達模様で、男女ともに漸く華美を競うて、貞享・元祿の盛期には、花の美も衣裳の美に氣壓されるやうになつた。こんな衣裳の美しさばかりではなく、歌舞音曲も盛に演奏されて、果は男女打群れて花の下に踊り狂うた。元祿の花見は既に風流人ばかりの花見ではなくなつた。

吉野山よしのやまこぞの枝折の道かへて、

まだ見ぬ方の花をたづねん。



徳川時代の花見

貞享
靈元・東山兩
天皇の年號。
(三三四—三三七)
元祿
東山天皇の年
號。(三三六—
三六〇)

吉野山
西行法師の
歌、新古今集
にある。

と、道もない山蔭を辿つて、淋しい花を眺めたのは既に昔のこと、東山祇園あづまぎん、或は清水の花の下蔭に、幕を打廻して花毛氈はなげを敷き、どりの遊興に、時繪の重箱かさねに山海の珍味といふ贅澤ぜいさくでなくては、花見らしくは感じなくなつたのである。



今の花見 (西山西翠庵筆)

思ひ起せば、余が十幾歳の頃は、近くは東山、遠くは嵐山あざなに男女打連れての花見といへば、まづ大風呂敷おほかぶの辨當はんたうは小者に提げさせ、男達は一瓢いっぴょうを携へつゝ、ぞろ／＼と朝早くから出かけたものである。麥畠むぎはたの間に紫雲英むらさきうんげい・蒲公英たんぽぽなどの點綴する野

東山・祇園・清水
ともに京都の
東方。

嵐山
京都市の西
郊。

路を辿つて十町も行く頃には、女連は着物の裾を端折つて、子供等と摘草を始める。男達は瓢箪の口を開ける。雲雀や鶯に稍興を添へて、花の蔭に行き着くまでには、もはや半ばは春色に酔うてゐたのであつた。殊に十三参りといつて、嵯峨の虚空藏菩薩に、その年十三になる子供を心ゆくばかり着飾らせて、花見かたぐひ参詣



蹟筆一政々佐

させるのであるが、それを親や兄弟が伴なひ行く綺羅びやかな同勢が、太秦御室の邊を練つて行つた姿は、今もまぎ／＼と見えるやうで、京染の華美を盡した友禪模様、嫁入衣裳にしては派手過ぎる好みや、やがて十三参りの特色で、これがまた元祿の花見姿をさながらに傳へたといふべきであつた。(醒雪遺稿)

嵯峨 京都市の西郊、平安朝時代のには貴人の別荘があつた閑静の地。虚空藏菩薩の法輪寺にある。

呵々として笑うてゐれば風をかをる醒雪

太秦御室 ともに京都市の西郊。

自修文

三 春の關東平野

近松 秋江

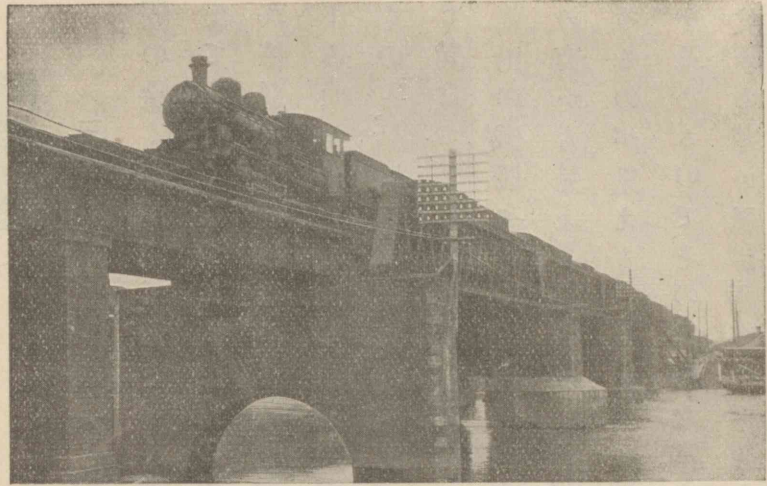
櫻の咲く春が来て、何となく廣々とした自然の味ははれる曠野へ出てみたくなつた。關東の平野は、どちらへ向いて出ても、それぞれ特別な趣があるが、私は北武藏から兩毛へかけての平野へ行つてみたかつた。同じ東京附近でも、上野口から東北方面へ出て行くのと、品川口から東海道方面へ出て行くのとでは、野の趣がまるで異なつてゐる。

荒川の鐵橋を渡つて、汽車が次第に埼玉の野を駛つて行くと、左方の窓から見える野の果に、甲州境の連山の上に、富士が白く秀でてゐるのが見える。荒川堤に櫻の咲く頃になると、霞が遠く武藏野を罩めるので、その秀麗な富士の姿もやうやく朧になるが、まだ秩父風の寒い風が關東の平野を吹いてゐる時分に、その方面を駛る

近松秋江

本名は徳田浩司、岡山縣の生、明治九年文學者

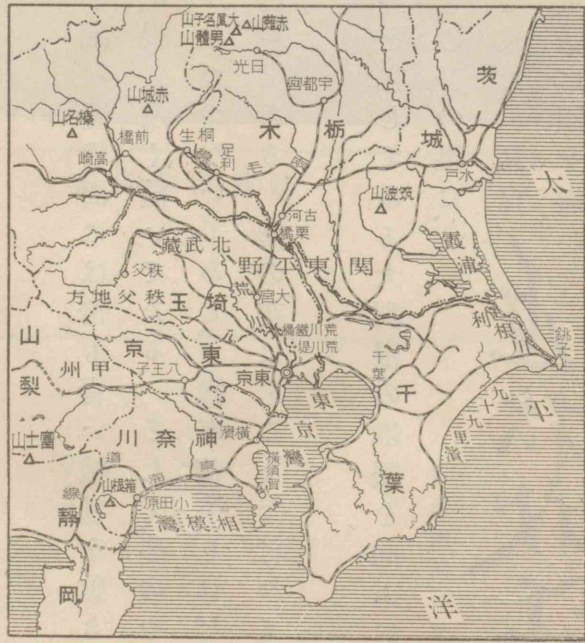
兩毛 上野國と下野國



荒川の鐵橋

汽車の窓から望む富士の姿は、東海道方面から望むその姿に比べると非常に違つて、雪の肌も純白に冴えてゐる。そして、あのわたりの野も、東京の南郊のそれと違つて、土が黒く肥えてゐるから氣持が好い。
四月一日、昨日の雨は名残なく晴れ上つて、例年よりも早く綻び初めた櫻花は恰も今が満開である。もう二三日も経つて春雨になつたら、花の見頃は過ぎてしまふであらう。櫻の花は俗のやうでも

あり、また雅のやうでもある。この俗のやうでもあり雅のやうでもあるところが、櫻の花が花の中の花と稱せられる所以であらう。櫻の花は、花それ自身よりも寧ろそれが春の駘蕩たる季節を代表する點に於て價値を有するのである。



駘蕩
春色ののどかなさま。

私はその日上野驛から汽車に乗つて東京の北郊を出離れ、武蔵の野に入り、埼玉縣の領域を通過して行つた。その途中、驛々の櫻は爛漫として咲き盛つてゐた。汽車の窓に蔽ひかぶさるばかりに

枝を翳してゐるその大樹を見上げると、満朶の花の隙から見える
彼方の空は、薄墨を流したやうに花曇に黒く曇つて、やつと咲き揃
つたばかりの花の壽命が、今宵一夜のほども氣遣はしいやうに思
はれた。

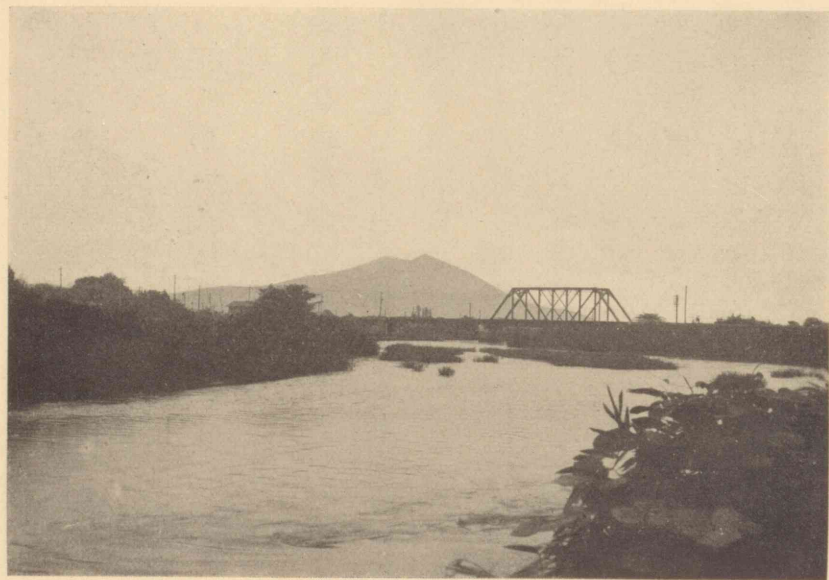
汽車の駛り行くさきへ、平潤な野の面には、恰も青い絨毯を敷き
展べたやうに、緑の麥の畑が眼も遠く續いてゐる。そして、夢のや
うな黄色い菜の花が處々少しづつ咲いてゐる。緑麥黄菜それだ
けで春そのもののやうな色彩である。櫻の花はどこまで行つて
も眞盛りである。

やがて、埼玉と茨城との縣界を劃してゐる大利根の鐵橋を向ふに
越して行くと、遠い麥と菜との野の果に、
筑波山が霞のやうに見えて來た。私は
右窓に倚つて、其等の遠景・近景に眼を遊

近松秋江

近松秋江自署

満朶
枝、つばい。



筑波山の遠望

ばしてゐると、汽車の進行につれて、次には左窓に雄偉な日光の山が遠く見えて來た。私はまた左窓に倚つて、そなたざまに眼を放つと、男體大眞名子赤薙の諸峰は歴々として指さすことが出来る。残雪が山の中腹あたりまで皺襞を刻んで、遠い野末の裾山の上に、泰然自若たる姿勢で雲表に聳えてゐる。兩毛は廣い平野と雄偉な山とを有してゐる。何といふ好い國であらう。汽車は驛毎に満開の櫻花によつて旅客を樂しませながら、綠麥の野を駛せて行く。駛せて行くに隨つて、左窓の日光の山々も、右窓の筑波山も、その色が次第に鮮かになるのであつた。

四 山莊雜記

荻原井泉水

今——晚春のひととき。
空は風の音もなく澄みきつて、

皺襞
ひだ。

荻原井泉水
名は藤吉、
京市の人、明
治十七年生、
俳人。

たゞ太陽が爛々と燃えて居る。
こゝは海のため中、

潮は浪の音もなく満ちきつて、
一つの青い島を浮べて居る。

青いのは皆麥畑、

畑は眞つ晝間のしんかん、
麥の穂がぐんぐんと伸びつゝあるばかり。

その麥畑に囲まれた一つ家、
自然の尊い静寂に浸つて、

私達は坐つて居る。

私達はたゞ黙つて居る。そして、

ぐんぐんと伸びる麥の穂を張りきつて居る潮の力を、爛々と燃える太陽の光を感じて居る。そして、

私達三人の心が、徐ろに伸び上り、静かに融けあひ、親しく熱しあふことを感じて居る。——今。

「何の物音もしませんね……」

ぢつと黙つて、餘りの静かさを味はつてゐたために、暫くとぎれてゐた後の言葉を、私はかう言つて繼いだ。そして、

「やはりこちらへ移らして貰ひませうか。」

と言つた。

「では、さう致しませう。机やお荷物などは後から運ばせます。」

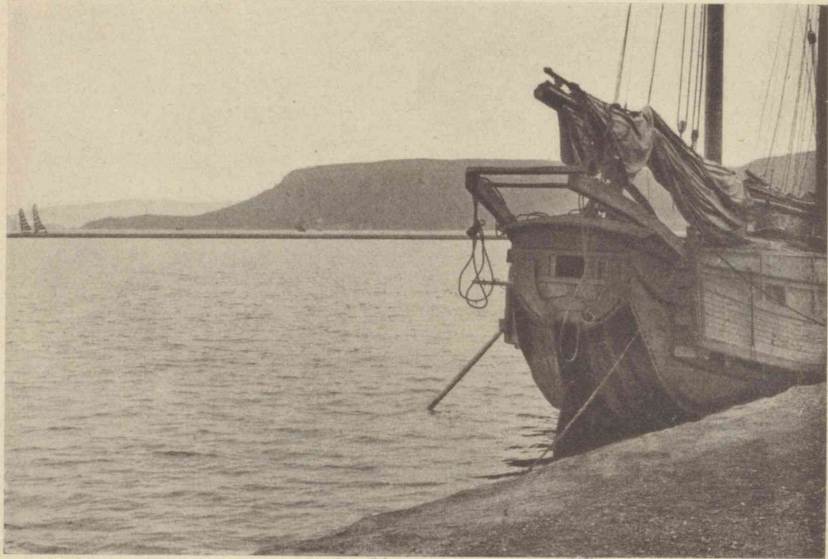
と、この山莊の主人のIは言つた。

「此處は、夜などは淋しいぐらゐですが、とうからお出での支度をして置いたのですから。」

とKは言つた。

私がこの小豆島に渡つて來たのは、二年越しの約束によつてだつ

小豆島
香川縣、瀬戸
内海の東部に
ある島。



望遠の島屋

Handwritten notes in cursive Japanese script, including the characters '望遠' (Shōen) and '島屋' (Shimaya).



師 大法 弘

といふ親み深い言葉だらう。四國八十八箇所に残された弘法大師の靈場を遍歴して歩くのがお遍路さんである。しかし、如何に信仰のためとはいへ、四國を一周することは、日數からも、努力からも、殊にお遍路さんに多い女の身として、大抵のことではないので、四國の代りにこの小豆島にある八十八箇所の靈場を一順すれば、同じ功德を積み得ることとされて居る。「島四國」といふ言葉も出來て居る。島四國の遍路にしても、女の脚では六七日かゝるといふことである。岡山若しくは高松から來るお遍路さんは、多くは船で土庄港に着く。そして、そこから發足して、第何番といふ札所の順に參拜の路を辿るのである。菅笠を被り、裾をからげて、背に

は手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名を書いた札を入れた札箱を吊して、塔婆形に刻んだ金剛杖を持つて、淋しいのは一人二人、多いのは何十人と團體をなして、銀のやうな海の光を浴びながら、海に近い麥畑の道を辿つて行く。それは繪である、美しいことである。この山莊にまで聞えるりん／＼といふ冴えた鈴の音は、彼等の先達が振つて居るものと見える。

お遍路さんは時を限らないが、風も日も長閑かに、路を歩くのに好い氣持であり、また農事も比較的暇な四月頃に一番多く見受けるといふことである。この頃島に着く船は、一日に何百人といふお遍路さんを渡して来る。一體、遍路といふものが、いつの時代から始まつたものかは知らないが、大師の教門を弘くする上からいつでも、各自の信心を厚くする上からいつでも佳いことである。そればかりではなく、お遍路さんは到る處で愛せられる、また恵まれ

糸
紐
紐
紐
杖
杖
杖
杖

る。お遍路さん同志もまた互に遍路であるといふことのために信頼する、また扶助する。これが實に佳いことであると思ふ。未知の人達が道連になつて親しんで行く。路を教へあひ、足らぬ物を足しあつて行く。

お遍路さんが路傍の家に荷物などを置けば、どの家でも喜んで預つてくれる。そして、それは決して紛失しないといふことである。これは遍路としての誰もが、一つの眞實の路に繋がつて居るといふ意識から來るのである。この道に參するには、知識も修養も資格も、そんなものは何もいらぬ。婆さんでも、娘でも、男でも、女でも、たゞ一つの道を信ずることによつて、この尊い心持に一致することが出来るのである。讃仰の聲が出て來るのである。これは實に美しいことである。争闘と欺瞞とに満ちたこの社會の中にあつて、信頼と扶助とに心を合せて行き得ることほど美しいことが

お遍路さん

萩原井泉水自署

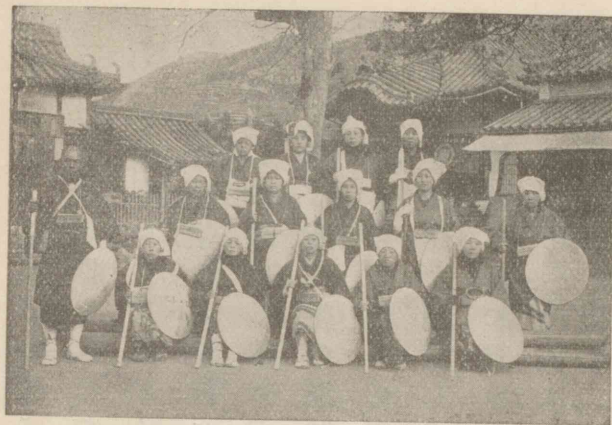
他にあるであらうか。この島の春を賑はすお遍路さんは、たゞ繪としてだけ美しいのではなく、彼等が愛しあひ信じあふことに生きるが故に美しいのである。

そして、この事はひとり彼等お遍路さんの上のことばかりではない。私達は皆人生の遍路である。めい／＼に自ら負はなければならぬものを負うて、自分の名を書いた札を撒き散らしながら、自分々々の路を遍歴して居るのである。しかも私達の周圍には、このお遍路さんに見るやうな信頼と扶助とが行はれて居るであらうか。私は思ふ、私はこのお遍路さんに學ばなければならぬ。遍路といふ行事を殘した弘法大師の暗示を感じなければならぬ。そして、人間の悉くがお遍路さんの心を心とするまでに到らなくても、私達はまづ信と愛とをもつて人生を歩きたいものであ

暗示の暗示

るしと。

山莊の夕はなかく暮れない。薄明るい光がいつまでも麥の穂



に漂うて居る。少しでもその明りのあるかぎり、雲雀は囀つて居る。雲雀は子供である。高い空にあがつて自分が見て来たことを話しても、ただ話があるといふ風に饒舌つて居る。かはい、奴である。木立の梢にも夕の明りが残つて居る。私は樹の名に委しくないが、どの木も、めい、に自分の芽を若い葉に擴げようとして居る。同じやうな緑といつても、よく見ると、その色の濃淡がそれ、違

山莊

ふ。形は勿論違ふ。かうして、どの木も自分の個性を伸ばして行くのである。若芽のすばらしい成長を見て居ると、私達は怠けては居られないことを思ふ。

夜はランプ一つ机に近く寄せて本を読む。ランプの光に向ふと、私の家にまだ電燈の來なかつた頃の、少年時代の氣持になる。顔に火照りを感じるぐらゐにランプの心を明るく出して、細かい字の辭書を繰りながら、むつかしい言葉の中から、正しい意味を掘り出さうと熱心に努力したものだつた。あの時代ほどの讀書に對する熱心が、再び私の心に燃えて來たやうである。私達が讀まなければならず、學ばなければならぬことの豊かな積量が私を興奮させる。温良な默想的なランプの光を机の上に展べながら、私は、この山莊の夜に湛へられた限りなく靜かな時を限りなく貴く感じた。(山水巡禮)

五 五月の太陽

新詩

萬造寺齊

初夏、もうアネモネは盛りを過ぎ、
蒲公英の花も終りに近づき、

今灼爛たる芍薬と、火焰の如き罌粟の季節。

見渡す京都の郊外は目覚めるばかり新緑に輝き、

花の匂、若葉の匂、土の匂、肥料の匂、

そのほか多数の名状し難い微妙な匂が、

馥郁として大地を蔽ふ。

花園太秦嵯峨嵐山……

林を横切り、

小川を渡り、

萬造寺齊

○本諫は西脇
か。吳石の筆にか
授。眞宗大學教
年生、明治十九
人、鹿兒島縣の
鹿兒島縣の

若草を踏み、

木蔭に憩ひ、

人家の間を通り抜けつゝ、

白い埃つばい田舎道を

足に任せて杖を曳けば、

五月の大氣の柔かさ、

五月の日光の暖かさ、

五月の微風の芳ばしさ。

然る

名のない路傍の雜草も時を得顔に蔓延し、

飽くまで栄養を吸収しつゝ、成長を急ぐ牛蒡豌豆。

柔かいみづくしい豊熟に近い一面の穂麥。

樹木の繁茂。

雲雀の狂喜。

昆虫の飛翔。

重畳しつゝ起伏しつゝ地平を限る緑の連山。
南へ急ぐ溪流の喜び勇む不断の跳躍……

大地はうごめく。

自然の胸は激しく波打つ。

(私は神秘的な交感により、自分の全身全霊に、その力
強い脈搏を、その快い体温を、その芳ばしい呼吸を
感じる。)

創造するもの、成長するもの、
醗酵するもの、奔放な精神、
その憧憬と情熱と、

その懐激と興奮とは、

息づまるほどあたりに充ち満ち、

洪水のごとくあたりに渦巻く。

私は大きく胸を張り、

渴いたものの慾深さで、

あたりに漲る五月の靈氣を、
自然の無量の命を吸ひ込む。

(あゝ喜ばしいこの若返り。)

私の眼は興奮に輝き、

私の血は陶醉に燃え、

私の命は健康に溢れ、

私は凡べての成長するものと、

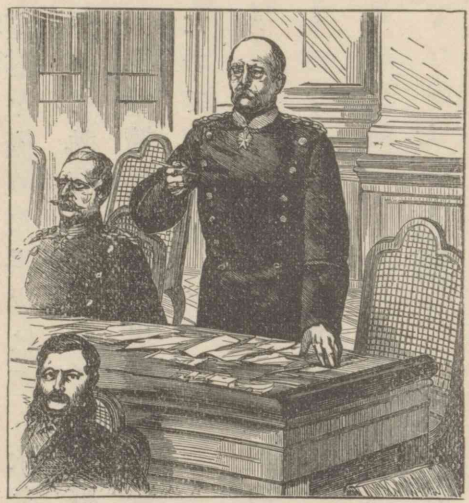
宰相ビスマルクBismarck*が一大軍備擴張案を議會に提出して、頑強な反對を受けたことがあつた。その身武將であるモルトケMoltke*、ローン等Roonさへ、あまりに重い税を國民に課する結果を恐れ、この議案に對して斷然不賛成を唱へた。ビスマルクは國家多事の秋あきに際し、軍備擴張の一日も忽にしてはならない理由を諄々と説いて、得意の熱辯を振つたが、しかも何等の效果もなかつた。彼は絶望の極、兩手を高く捧げて、

「噫、神よ、我等は軍隊を有せざるべからず。」



河　　ン　　イ　　ラ

ビスマルク
ドイツの政治家。
家。(1815—1898)
モルトケ
ドイツの元
帥。(1800—1891)
ローン
ドイツの陸軍
大将、政治家。
(1803—1879)



クルマスビの中説演

と叫んだ。この悲劇的な歎息を聞いても、議員等は依然として馬耳東風、一向彼の窮境に同情しようとしなかつた。その時、ビスマルクは何と思つたか、突然態度を改めて立ち上つた。そして、いと嚴かに「ラインの守の一節を高誦した。

劍戟の響、
怒濤の叫、
雷轟くをたけびの
聲を聞かずや。
ライン。ライン。
ドイツのライン。

神聖なる流を
愛する祖國よ、
今誰か守る。
とはに安かれ。

子等は固く守れり、
固く守れり、
ラインを。

喧囂けんぎょうを極めた議場は忽ち水を打つたやうに静まつた。議員等はやがて熱狂して、彼の吟誦ぎんじゆに聲を和した。かくてビスマルクの大軍備擴張案は、満場一致の賛成を以て、無事議會を通過するを得たのであつた。

あゝ、ライン河はドイツ國民の頭上に、實にこのやうな魔力を振ふものなのである。(傳説のライン)

七 萬國オリンピック大會に出場して

人見絹枝

私は第二回萬國オリンピック大會に出場するため、大正十五年七月八日、日本を出發しました。途中、〔哈爾濱〕ハルビン、〔莫斯科〕モスクワ、レーニングラド、〔哈爾濱〕Khabin、〔莫斯科〕Moscow、〔ハルビン〕Leningrad

人見絹枝
岡山縣の人、
明治四十年
生、運動家、
大阪毎日新聞
社員。

ラードなどで、熱誠な歓迎の中に、その地の體育設備などを見學しました。目的地のスウェーデン〔瑞典〕のヨテヴォーク*に着いたのは八月四日の朝でした。言葉が分らないのと、この地には日本人がゐないのとで、到着早々には大變困りました。

日々の練習にも、ほんとに一人ぼちでしたので、非常に寂しい思をいたしました。併し、日本にゐた時にも一人で練習してゐたではないかと氣を強くして、三週間猛烈な練習を続け、また他の國の選手達の練習も見ました。

大會の始まるまでは絶えず自分のレコードRecordの不振なのが案じられて、落着かない日を送りました。愈、明日は大會だといふ前夜は、早くから床に就きましたが、種々のことが頭に浮んで、なかく眠られませんでした。何といふ修養の足らぬことかと、幾度か自分で自分を叱つて見ても、何の甲斐もなく、とうとう、午前一時頃まで

ヨテヴォーク
ヨテヴォーク、
ゲーテボルグ、
ともいふ、ス
ウェーデン西
南部の都會、
カテガット海
峽に臨む。

眠られませんでしたが。その夜の私の悶えは到底言葉では言ひ盡されません。これでは所詮明日は駄目だといら／＼する内に、い



(右) 杖 網 見 人

(萬國オリンピック大會で最高賞メダルを受けてゐるところ)

と向ひました。見れば、会場には各参加國の國旗がひら／＼と勢よく翻つてゐます。各國の選手達は皆大國旗を立てて、堂々と入場しました。これに反し、私はたつた一人、二尺四方ばかりの日章

つの間にか眠つてしまつて、眼が覺めたのは翌日の午前十一時頃でした。これでもう安心、今日はきつと活躍が出来ると思ひ、朝食を済まし、マツサージにかかつて、午後五時会場へ

旗を立てるといふよりは、寧ろ抱いて入場しました。この瞬間、私は自分といふ考を全く失つて、たゞ日章旗を抱いて居るといふ考だけになつてゐました。この第一日目には、私は、百ヤード競走、圓盤投、二百五十メートル競走の三つの競技に出場することになつてゐましたので、非常に忙しい思をいたしました。

〔米突〕

〔碼〕

百ヤード競走、これは前から私が最も面白いと思つてゐましたもので、豫選では英國のハイネスといふ名選手と組みましたが、私はこの豫選で第二着までにならねばならないので、どうなることか

Haynes

と思つてゐましたところ、愈、スタートして見ると、どういふ風の吹き廻しか、第一着十一秒八になりました。そして、決勝では、英國の名選手のトムソン・ハイネス、佛國のラヂドゥ、チエツクスロバキヤ

Start

のエモローバー、このやうな一流選手の争覇戦の中に私が加はることになつたのであります。スタートの後五十ヤードまでは皆

Thompson

Radiceau

Ozcho-Slovakia

Emolova

が一直線上を走つてゐましたが、それを越すと、ラヂドウが私等の線から二メートルぐらゐる差をつけ、トムソンがすぐその後を追つて走りました。そして、私とハイネスとが並びました。第一着、第二着、それには二メートルぐらゐる差がありました。そして、結局、

- 一 佛國 ラヂドウ 一一、八秒
- 二 英國 トムソン 一一、八秒
- 三 日本 人 見 一二、〇秒
- 四 英國 ハイネス 一二、〇秒

となりました。私とハイネスとは互角の成績になりました。佛國のラヂドウは百ヤードに十一秒一の世界レコード保持者だけに、その勢は凄いものでした。

百ヤード競走の豫選と決勝との間に、圓盤投の豫選が行はれました。この競技の参加者は十九名で、その内(波蘭)ポーランドのKonopackaコノパス

カ、チエツクスロバキヤのVidlakovaヴァイドラコーバー等は、皆三十五メートル臺のGood recordグッドレコードの保持者でした。ヴァイドラコーバーは、西曆一千九百二十二年の第一回萬國オリンピック大會の時既に三十二メートル臺のレコードで世界レコードを作り、最近コノパスカが新レコードを示すまでは、世界レコード保持者として知られて居る人です。コノパスカも新進の選手として多くの人の注意を惹いてゐます。私は圓盤投は日本に居る時は一寸もやつたことがなく、こちらに来て初めてやり出しましたので、そのレコードも三十二メートルといふ貧弱なもので、とてもこれらの諸選手に伍して競争することが出来るわけはなかつたのですが、ただやつて見たいといふ希望を抑へかねて、随分無謀だとは思ひながら、とうとう出場したのであります。

百ヤード競走の豫選で高まつた胸の鼓動を靜める暇もなく、私は

續けさまに二回の投擲を行ひました。もうこの時はコノパスカ
 が三十五メートルのラインを遙かに突破してゐたばかりでなく、
 スウェーデンの選手二人までが三十二メートルのラインを超え
 てゐましたのに、私は第二回目の投擲にやつと三十二メートルの
 ラインにかゝつたかかゝらぬかぐらゐのことでありました。
 この二回目の投擲が終ると、もう百ヤード競走の方の決勝の行は
 れることが、アナウンサーの喇叭の口から場内に向つて告げられ
 ました。そこで、私はそちらの方に出場しましたが、この決勝で前
 に述べたやうな思ひがけない好成绩を得て、私の心は大層勇氣づ
 けられました。そして、再び圓盤投を續け、第四回目には三十三メ
 ートル六三を突破することが出来ました。しかし、一方コノパス
 カは三十七メートルのラインを堂々と掠めてゐました。決勝の
 報告を待つて見ると、コノパスカは三十七メートル七一のレコー

ドを以て、更に自分の持つ世界レコードを引上げてゐました。ポ
 ーランドの國旗は高く優勝マストの上に掲げられました。
 圓盤投の決勝が終つて二十分と間をおかないで、又二百五十メー
 トル競走が行はれました。私は豫選では無事に通過しましたが、
 疲勞のため決勝ではとうとう第五着になつてしまひました。
 この時の第一着は英國のエドワード選手で、三十三秒四のタイム
 を以て立派に世界レコードを作り出しました。漸く北歐の競技
 場に暮色の薄らうとする午後七時四十分、英國の大國旗は優勝マ
 ストの上に翻り、五萬の觀衆は一齊に起立して、この旗に向つて英
 國國歌を歌ひ出しました。この様子を見て、私は壯嚴の感に打た
 れないでは居られませんでしたが、さうした中にも、私の胸にいふ
 にははれぬ一種の奮勵の念が湧き上つて來るのを禁ずることが
 出来ませんでした。

第二日は走幅跳でした。この日は槍砲丸の二技を棄權して、走幅跳に全力を注ぎました。戦は初から白熱化し英國のガン選手は調子よく五メートル四四のレコードを出しました。私にはどうしてもそれ以上のレコードができません。残念と思ひながら、もう後一回といふ時、とうとう右手に怪我をしてしまひました。手から流れ出る血を握りしめて、後一回の競技をしようとした時、ほんとに私は苦しうございました。併し、どんなにしても勝たねばならない。今日は日章旗を人々の前に見せてやるのだ。こゝまで来て生恥をかいて歸れるものか。あゝこの一回こそは日本のためだと、流れる血を握りしめて、私は靜かに神に祈り、最後の競技を試みました。それが五メートル五〇で、世界レコードを破つたのです。日章旗は高く翻り、見物人は全部起立して、君が代の奏樂に合せて私に目禮してくれました。この有様を見て、私の眼には涙

がにじみました。

第三日目は六十メートル競走に第五着、立巾跳に第一等となりました。この六十メートル競走には、前日の手の痛みさへなければ、若しかするといゝところに行けたかも知れませんでした。この日も日章旗は高く掲げられました。この時、私は自分の名譽も、貰つた多くの賞品も、嬉しいには違ありませんでしたが、それ以上に自分の責任の重いことを感じました。

日本の女子は今後世界の檜舞臺に立つことが出来るだらうか。とよく私は人々から聞かれますが、私は女ですから、女の方々にだけに申します。日本の女子は、これからは、今までのやうに、人がボールを投げるから自分も投げよう、人が水にもぐるから自分ももぐらうといふやうな、そんな流行じみた浮薄な心を全然棄てて、今少し

浮薄

眞面目に體育そのものの意味をよく噛み分けてやつて行かなければ、到底諸外國の女子の間に伍して優勝の地位を占めることは出来ないと思ひます。

ハ テニス

深き緑と、縛るゝ微風と、

躍れるものよ、湧き立つものよ。

柳澤健

柳澤健
福島縣の人、
明治二十二年
生、文學者、
外交官。

足には輕き白靴を、手にはボールを、
狙ひくゝて彼女の肩を。

ボールは強く右手にひやく。

微風よ、微風よ、さゞめき立てよ。

白きラインと、白靴と、緑の芝生、風の舞。
ボールは弾き、一息にさゞめく風を切つて出づ。

白きネットに、燦爛と陽は彩々の青と散る。

五月の黄金に塗られたボールは跳る、靴のそば。

子供は叫ぶ、柵の外。

空には光る、蝶の羽。

深き緑と、縛るゝ微風と、

躍れるものよ、湧き立つものよ。(柳澤健詩集)

九若さ

高村光太郎

若いのはいい。何か知りたくて、また遊びたくて、疲れることが疲労でなくて休息であるほど若いのはいい。若い人を見て居ると、自然と心が腕を伸ばして来て、しまひには思はず頬笑まされる。若い人のみづくしさは、色々な意味でこの世を救ふだが、恐らく若さの美德を若い人に説くほど變なものはあるまい。若さの真中に居る時に若さの價を聴かされるほど可笑しいことはあるまい。餘りあたりまへ過ぎることを聞く氣がして、何の不思議も感じまい。あ、かういふ無自覺は本當に貴い、力強い。

若さの美德を痛感するのは若い人ではない。若い人はやがてひとりでにそれを感じる時代が来る。若さのよいのは、若さを持つて居る時ばかりでなく、若さを忍ぶ時でさへもよい。若さを自ら知らぬ若い人よ、あなたがたの體力の續く限り、精神力の續く限り、

高村光太郎
 東京市の人、
 明治十六年
 生、彫塑家、
 詩人。

W. 05



高村光太郎

自分の内からの疚やましくくない欲望の聲に忠實であるが、何が疚しいか疚しくないかについては、外からの標準はない。自然は人間の心に自らそれを感じさせる仕掛を作つて置いて居る。一番よく自分の内の聲を聴くものが、一番正しい生活に入るのである。人間世界の道德律はかうして自然に出來たものだと思ふ。若い人が「淨らかさ」に敏感であるのは、人間本能のいかに信頼すべきかを説明するものである。若い人よ、あなたがたのその敏感さを守るが、力を盡して清淨に進むが、この世は清淨ばかりの世でなく、寧ろその反對のものが充満して居るには居るが、しかも常に清淨であることを望んで居る。それが自然の植ゑつけた本能である。

自分の淨さを守ると同時に、人の淨さをも守るがい。汚れたものは恕せ。自分の過を知つたなら、心から自然にあやまるがい。そして、あとは忘れるがい。若い人よ、みづ／＼しい氣力に満ちた人よ、あなたがたは心おきなく勉強するがい、遊ぶがい。あなたがたは必ず自然からあなたがた獨得の特質を與へられて居ることを信ずるがい。あなたがたがあなたがたの良心に従へば、この世ではきつと戦はねばならぬことに會ふだらう。その時、あなたがたの後楯に自然がついて居ることを思ひ出すがい。勝敗はあなたがたが自分の内の聲に聽いたか聽かぬかによつて定まる、相手を倒したか倒さぬかによつて定まるのではない。立身出世教や成功熱は人間の本能である進展意
高村光太郎自署

高村光太郎

思を悪用した畏である。これに引
 つかゝると、魂を傷つけられる。立

身出世の代表者のやうに見られて居るあのリンカンの美しい心事を考へて見ても、いかに立身出世教の恥かしいものであるかが分る。立身出世したリンカンは決してそんな教を奉じはしなかつたのである。
 若い人よ、十分腕を伸ばして太陽を浴びて歩くがい。悩む時には悩まねばならぬ。悩んで尙且明朗で居られる永遠に若い魂となるのには、若い時の精神的鍛錬が肝要である。

自修文

一〇 小泉先生

厨川白村

贈從四位小泉八雲。かう書けば、知らない人は日本人かと思ふだらうが、小泉先生の血管には、日本人の血は一滴も流れてゐなかつた。美しい神祕と空想との世界に生きるケルト民族の
（愛爾蘭） Ireland

一〇 小泉先生（自修文）

リンカン
 アメリカ合衆
 國第十六代の大統領。
 (1809-1865)

厨川白村
 名は辰夫、京都市の人、英文學者、京都帝國大學教授、大正十二年四月二十四日歿。
 小泉八雲
 東京帝國大學講師、明治三十七年五月五日歿。
 神祕
 靈妙不可思議
 出づる秘密。

ンド人を父とし、昔歐洲の花やかな藝術と文明とを生み出した(希臘)ギリシャ人Græciaを母とした純粹な西洋人だつた。アイルランドに育ち、(佛蘭西)フランスに學び、米國に人となつて、四海に家のない飄零の孤客だつた先生は、東海の果にあると傳へられて居る蓬萊の國に憧れて、明治二十三年、始めて我が日本の國土に來られたのである。それはハーパース社Harpersの一通信員としてだつた。後、出雲に居られた時歸化して小泉八雲と名のられた。近代英文學史上に於ける散文の巨擘として、歐米の文壇には、先生のラフカディオ・ハーンといふ本名の方が轟き渡つて居る。多少讀書の趣味を解し、或は苟も日本日本の存在を知つて居る英米人で、先生の名を知らないものは殆どなからう。

飄零 一人の旅人。
孤客 一人の旅人。
蓬萊 神仙の栖んでゐるといふ空想上の島の名。
ハーパース 米國ニユーオブリーンズの書肆。
巨擘 大家。
數次 數回。
隆昌 隆昌。さかん。

4242B 212

17 14

美の麗筆が與つて力のあつたことを思はねばならぬ。見給へ、ただ觀光を目的として來朝する英米人の十中の八九は、先生の著書の愛讀者ではないか、或は少くともその一二を必ず行李の底に納めて居る人達ではないか。

厨川白村及びその自署



先生は如何にも風采の揚らない人だつた。瘦身、矮軀、實に白人には珍しいほど小柄な人だつた。いつも前屈みに背を圓くして、ひよこひよここと歩いて居られた。兩眼は殆ど視力がなく、左は盲目、

絢爛 美しく鮮かなさま。
婉美 美しいさま。
觀光 見物。
功績 功績。いさを、てがら。嘉す。好しとする。
沙汰 指令。
慶事 慶事。よろこばしいこと。
瘦身 痩身。やせたから。
矮軀 矮軀。ただの短いからだ。

右は眼球が大きく飛び出して、それがまた強度の近眼だった。時
 時極めて稀にポケツトから片眼鏡を出して、ちよつと右の眼に當
 てられた。その稀世の名文に寫された日本の文物・人情・社會等の
 精透な觀察は、凡べてこの弱い眼に片眼鏡を當てられる僅か十秒
 か二十秒かの間の凝視の結果だったのだ。大きな眼玉をぎよ
 つかせてゐながら、心眼の盲ひた凡俗には、とても見えない或物を、
 先生はかうして常に鋭くもまた敏く觀破されたのだった。
 帝國大學の講師として、先生は年々歳々新しい題目で新しい講義
 をせられた。固より準備にも相當に骨を折られたことだらうが、
 美しい、そしてよく整つた明快な講義の文章は、皆即座に、即興的に、
 先生の口から出たのだった。學生に書取らせるやうに、考へなが
 ら、ゆつくりと、しかし、少しの淀みもなく語られた。時々は即興の
 散文詩ともいひたい美しい文句や奇拔な警句が、口を衝いて出る

精透 精透はしくす
 きとほる。
 凝視 見つめるこ
 と。
 凡俗 なみく
 人。な
 觀破 見ぬく。
 即興 その場でのく
 ちずさみ。
 奇拔 大層珍しいこ
 と。

衝
 口を衝いて出る

のだった。咳唾これ詩といへば古からう、錦心繡腸これを織りな
 した五彩絢爛の絲をほごして、練つてもく、縷々として盡きない
 趣は、實に鮮かだった。銀鈴を振るやうなその聲は、またその文の
 美しいやうに美しく、抑揚・高低にさへ何の不自然もなかつた。斷
 續しつゝ、一言また一句、皆よく聽者の胸底に詩の靈興を傳へるに
 足るものがあつた。ふと目を舉げて先生を見る時などには、大抵
 窓外を眺めながら、講壇のあたりをあちこちと靜かに歩いて居ら
 れた。
 天才といへば不規則なものやうに心得て居る人もあらうが、勤
 勉努力の人だった先生は、非常に、几帳面で、鐘が鳴ると間もなく、重
 さうな風呂敷包に、美しい装釘の詩集や文集を幾冊も入れたのを
 提げて、あたふたと教室にやつて來られる。講壇に上つて一揖し、
 ごく低い澄み渡つた聲で、グッド・モーニング・ gentlemen といひ

警句 すぐれて鋭い
 文句。
 咳唾 せきとつば。
 錦心繡腸 美しい思想。
 縷々 絶えないさ
 ま。
 抑揚 おさへたりあ
 げたりするこ
 と。
 斷續 きたり續い
 たりする。
 靈興 味。
 装釘 装釘の表装と
 綴方。
 一揖 一禮。

風呂敷

Good-morning, Gentlemen

てこの極めて強い近視眼のために幸せられ、部分的な細微の點を拂拭し去つて、一幅の全景を心裡に活躍する効果を收め得られたのだ。(小泉先生そのほか)

一一 女質の絶對維持

女性が教育を受けたり職業に就いたり社會運動に従事したりするのは、人として向上するがためであつて、男性になるがためではありません。男女の區別は必然の關係から生じたものですから、女性はどこまでもその天賦の女質を維持せねばなりません。男女は人として共通し、且同様に行動すべきことが多いにしまして、男が折角男に生れて男らしくすることを要するやうに、女も折角女に生れて女らしくすることを要します。

拂拭 はらひふく。
活躍 はらひふく。
生きたくとは

天賦 女質 咳

から賦與された性格を以て、最も適當に生存することを意味します。女分の多い男があり、男分の多い女があり、その傾向は境遇によつても違ひますけれども、性に基づく特質は務めてこれを維持

し助長せねばなりません。



（畫壁のノオテンバ）クルダシ、ジ

治めるなど、さすがに處女だと思はれました。ジャーンが變成男子だつたならば、その傳記の大部分は興味を失ひます。

ジャンドルクが甲冑を被つて馬を陣頭に躍らせたのは、天晴の武者振ではありまして、たけれども、その死に臨んで、髪を梳り容を

男の眞似をせねば能力を伸ばし得ぬといふ理由はなく、女らしくしても能力を伸ばすことが出来ます。學問を修め、職業に就き、世間に立働くからといつて、生來の女質を幾分でも失ふのは、女たるものの恥辱です。(女性日本人)

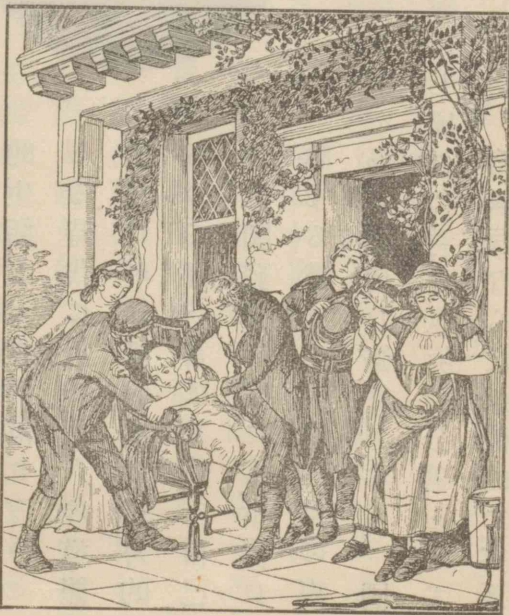
一二 新時代の修養

杉森孝次郎

人類の生活を大別すると、經濟的と文化的との二つになる。そして、今日の文明諸國民の經濟的生活は、既に甚しく國際的になつて居る。貿易が即ちこれを證明する。今日の製造家で、其の原料を國內だけから仕入れる事が愛國的行動だと心得て居る者はない。日本ならば、鐵や棉を(亞米利加)アメリカ及び印度から輸入する。また製作品を賣るに當つても、自國民にだけ供給する事が愛國的行動だと心得て居る者もなく、誰も廣く世界の隅々にまで賣り擴めようと

杉森孝次郎
静岡縣の人、
明治十四年
生、早稻田大
學教授。

する。また一個の消費者即ち普通の買手にしても、自國の製品でなければ買はないと云ふ事が、愛國的行動だと心得て居る者もない。要するに、經濟的生活は既に世界的になりつつあると云ふ事實が発見される。



— ナンエジのるみてみ試を痘種てめ始

轉じて文化的方面を見ると、世界主義の發現は一層顯著だ。(英吉利)イギリスのジェンナーが種痘法を發見すると、これと交戦中のドイツ人も平氣でこれを實行した。またドイツのレントゲンがX線を發見すると、英佛の負傷兵も安心して其のお蔭を蒙つた。一國の

ジェンナー
英國の醫師、
牛痘接種法の
發明家。(1759-
1823)
レントゲン
ドイツの物理
學者、ミュン
ヘン大學教
授、X線の發
見は西曆一八
九五年。(1845-
1923)

學者が新學説を發表し、一國の藝術家が新創作を發表すると、其の學問上の友人と藝術上の知己とは、國境にかゝらず、地球の東西南北に簇出する。



レトング

斯くの如く經濟的生活と文化的生活とが世界的になりつゝ、ある時代に於て、吾人の道德思想だけが鎖國的また排外的であつて好い筈はない。自己發展・自國發展の爲にも、世界に貢獻する意志が國民各自の事業や行動の根柢に健在して居る事を最も必要な條件とする。國內の惡を世界の公惡として排斥し、國外の善を世界の公善として助成する誠意がなくてはならない。自國民ならば道德的に劣惡で



杉森孝次郎

あつても優遇し、他國民ならば道德的に優勝であつても虐待すると云ふ方針は、各國共にこれを改める必要がある。併しながら、言語が異なり、血縁が遠く、風俗習慣及び歴史を共通にせず、居住地域が遠隔であると云ふ事實が猶今日の程度に於て存在する限りは、遽に國際主義の直接實現を企てる事は無理である。現に經濟生活を見ると、列國は何れも保護主義を執つて居る。此の保護主義即ち關稅制度の現存する事は、列國が皆自國本位主義を執つて居る證據である。世界大戰の原因經過及び戦後の實狀を精査すると、如何に自國本位主義が世界主義よりも優勢になつて居るかわかる。此の自國本位的傾向と世界主義的傾向の兩者を完全に

支配する事は、今後の各國民の要務である。人間は理性の外に慾望をも情愛をも恐怖心をも有して居る。

此の人間の本性の全體を組織的に支配する事は、個人として世に處し人と交際する上に於ても、また國家として世界の各國と立交る上に於ても、共に必要である。

要するに、個人に就いて言へば、各自が強い善人になる事、勇氣のある知者になる事、人道的聖志のある英雄豪傑になる事が、新時代の修養の要件であり、國家に就いて言へば、自國をして隣國・他國・世界に取つて有用な必要な國にならせる事が、新時代の愛國の要義であるのである。

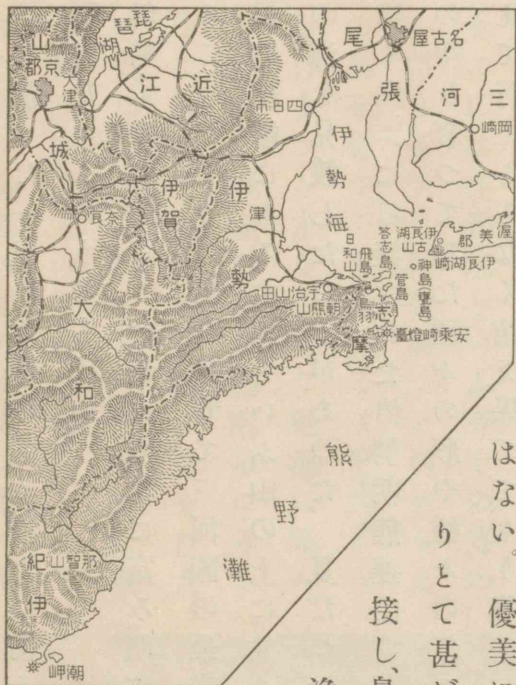
杉森孝次郎

杉森孝次郎自署

一三 伊勢志摩の海

田山花袋

田山花袋
名は録彌、
馬縣の人、
治四年生、
學者。 文明群



南歐の風光、地中海の大觀を見馴れた西洋人でも、日本の海岸美には一驚を喫せずには居られないさうだ。その日本の沿海の美、その美の最も遺憾なく發揮されて居る處は決して少くあるまいが、自分の見た中では、伊勢の海からかけて志摩・紀伊の沿岸に如く處

はない。優美に傾かず、淒涼に過ぎず、さ

りとして甚だ平凡に陥らず、港灣が相

接し、島嶼が相連なり、斷江荒磯、

漁村蟹戸、燈臺もあれば松

原もある。海水が深く

陸に入つて、恰も溪流の

やうな入江をなすかと

思へば、月光が閃々とし

て千里の海上を照らし、

斜に欹つた一帆の片影の遠く雲外に消える光景など、殆ど應接に暇がないというてもよい。

伊勢志摩の海！ いかにも變化に富み、明暗に富み、空想に富んで居ることだらう。自分は嘗て三河國の最南端、渥美郡の一角、伊良湖村の絶端にある古山といふ山の上に立つて、一眸の下に伊勢志摩の海を見渡したことがあつた。夏だつたが、日は一時間ほど前に遠く向ふに打渡された伊勢朝熊連山の蔭に落ちて、一時美しく西の空を彩つてゐた種々の形や種々の色の面白い夕の雲も、いつ消えて行くともなく消え果てて、もう薄暗い夕暮の光が、何處ともなく暗碧の波の上に寄せてゐた。

見渡すかぎり、舟といふ舟、帆といふ帆は一つもなく、たゞ海の處々に白く碎ける波の頭が見えるばかりで、その淋しさといつたらなかつた。左の方に、海上一里ばかりを隔てて神島が見える。丁度

伊良湖村
一端は伊良湖
張國の知多半
島の師崎と相
對してゐる。

甕を倒さまにしたやうなので、一名甕島ともいふさうだが、この島は行つて見るとなかく、風情に富んで居る。西の山蔭に五六十戸の漁村、そこには桂光院といふ寺、その寺の一室を借りた村役場、それからその島を廻つて東に行くと、怒濤が天を吞まうとするやうな絶海に臨んで、絶大な洞窟の奇觀、満潮毎にその中に吞吐する海水の響は、恰も巨人が天に向つて叫ぶやうで、その壯觀は到底都人士の想像し得るところでない。神島の少し右方に當つて



朝熊山上から望んだ伊勢志摩の海岸

黒い／＼大島の影、それは志摩の答志島だ。菅島・飛島、その他無数の大島・小島。

日は漸く暮れて、海の色は愈、黒く、その上に浮ぶ島々の影も微かに、星の瞬、遠海の囁、遠山の姿、自分は深い／＼空想に耽つた。「平和！人の世の平和とは抑、何ぞや。」自分はかう叫んだ。平和を望む心、平和を欲する念、遂にこれおのれの弱きを表白して居るではあるまいか。見よ、この自然を。見よ、この大観を。海は四方から來て陸を吞まうとし、陸はこれを拒ぐべく全力を盡して居るではないか。島岩岸、此等は皆陸の遣はして以て海の怒濤を拒がせるものではあるまいか。けれども、海は時の永久の力を藉りて、次第に陸を侵蝕し、島を崩し、岩を碎き、岸を陥れて、漸次陸の運命を締めつゝあるのではあるまいか。

「戦闘！」と自分は叫んだ。實際この伊勢の海の大観に接すると、誰



山田 花袋

でも戦闘といふ感を起こさずには居られまい。水と陸と波と山とが、いかにも互に刃を交へて居るやうに配置されて、伊勢の内海はまるで海水に攻め落されたやう。その海門を守る諸島の影は、孤城落日の状態に陥りつゝ、なほ陸のために節を守つて奮闘して居るやうに思はれるのだ。

若し人が、自分が空想に耽つたやうに、その古山の一角に立つて、薄暮の影の四方に満ち渡るのも知らずにゐたならば、千鳥の淋しげに鳴く聲が、歌のやうにその耳を掠めるので、覚えすその恍惚から覺めるだらう。その時は、影の低いばら／＼松の間を過ぎて、外海に面した荒磯の方へ辿り行くがよい。そして、松原を出て了つたならば、足を留めて神島とその向ふに遠く微

香花火のやうにびかつと光つて、そしてすぐ消えるものがあるだ
 らう。何だと思ふ。燈明崎——志摩國安乗の廻轉燈の光だ。
 あゝ、この詩趣に富んだ燈臺、自分は殆ど想像するにも堪へないの
 だ。絶海の畔、漁村を距ること數町、磯馴松が風に吹かれて、皆面白
 く斜に捻れて居る半島の絶端、懸崖千丈、暴風雨の荒れる夜などは、

田山花袋筆蹟

かに連なり渡つた志摩の
 山脈との間を見るがよい。
 月の夜には、その明かな光
 に紛れて、それと分明に見
 出すことは出来ないかも
 知れないが、闇の夜には、物
 凄波の上に、大凡一分間
 ぐらゐづつ間を隔てて、線

この冬のさむさむ
 さしられたさむ
 つより去る
 こと早しも去る
 の小鳥は

怒濤の響、松の響、海の鳴る響、風雨の吼える響、それらの凄じい力に
 殆ど燈臺が吹き飛ばされて了ひはしないだらうかと疑はれるば
 かりのその燈臺に、若い空想がちな青年、さうでなければ、年老いて
 世の荒波に漂ひ果てた老爺、それが、靜かに穩かに、世の中ではとて
 も見ることの出来ない悠揚たる態度で、海に悩む船人のために、そ
 の夜毎々々の勤を怠らない淋しい生活。どんなに空想に乏しい
 人でも、これを見ては必ずさまざまの想像を起さずには居られま
 い。
 (草枕旅すがた)

一四 安乗の稚兒

伊良子清白

志摩の果、安乗の小村、
 はやて風岩をせよもし、
 柳道水々を根こじて、

伊良子清白
 名は暉造、
 取縣の人、
 治十年生、
 師、詩人、
 醫明鳥

安乗の稚兒

一四 安乗の稚兒

虚空飛ぶ斷れの細葉

水底の泥を逆上げ、

かきにごす海の病

そゝり立つ波の大鋸

過げとこそ舩を待つらめ。

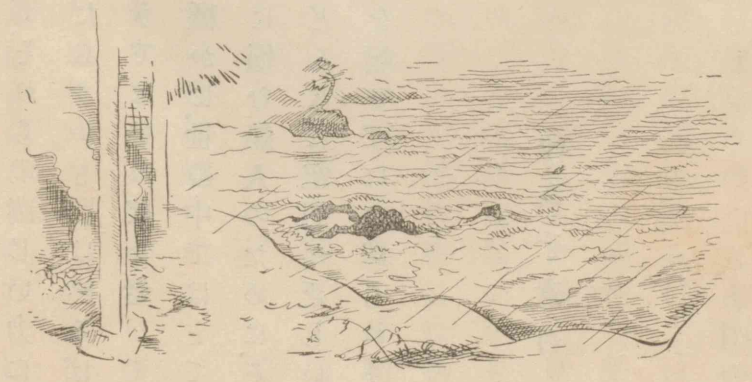
とある家に飯蒸せかへり、

男もあらず女も出で行きて、

稚兒ひとり小籠に坐り、

ほゝゑみて海に對へり。

荒壁の小家一村、



反響する心と心、

稚兒ひとり恐怖を知らず、

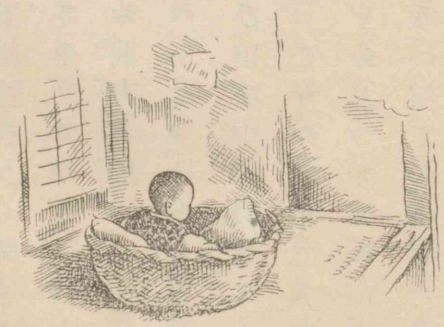
ほゝゑみて海に對へり。

いみじくも貴き景色、

今もなほ胸にぞ跳る。

少くして人と行きたる

志摩の果安乗の小村。 (現代日本詩選)



自修文

一五 東海道中膝栗毛

十返舎一九

東雲まだき驛路の忙しげにひきつる、朝出の馬の嘶に、旅疲の目を擦りながら、彌次郎北八起き出でて支度し、爰を立ち出で、譽田の

十返舎一九
本名は重田貞
一、駿河國の
人、江戸時代の
後期の戯作の
者、天保二年
(一八三一年)没、
五十七(或は
六十八)ともい
ふ。
東雲
夜あけ。
譽田
遠江國、日阪
驛の南、八幡
社宮は現に縣

一五 東海道中膝栗毛(自修文)

脚脚脚脚脚脚

八幡を打過ぎ、それより鹽井川といふ處に至りけるに、昨日の雨強くして橋落ちけるにや、行き通ふ人自ら股引を取り裾を捲き上げて爰を渉るに、彌次郎北八もいざや引連れて渉りなんとする折柄、



九 一 合 返 十

ど水の音がよつほど早い。といひつゝ、石を拾ひ、川の中へ投げこんで考へ、犬市いや、こゝらがどうか浅いやうだ。こりや猿市、二人ながら脚絆を取るも面倒だ。おぬし若役に己をおぶつて渉れ。猿市は、ずるいことをぬかす。拳で參らう。何でも負けた者

京のぼりの座頭二人連、この川の徒渉なることを聞きけるにや、一人の座頭、犬市もし、川は膝ざりも御座りますかな。北さやう、さやう。併し、水が早いからお前方あ危い。用心して渉りなせへ。犬市はあなるほ

座頭めくら。

膝ざり膝までとつくこと。

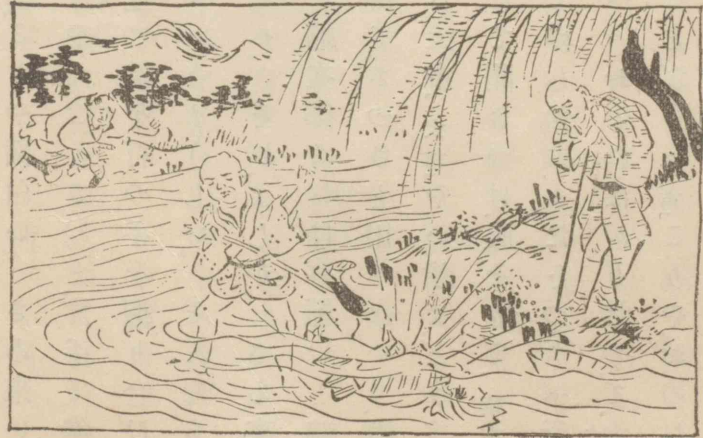
おぬしおまへ。

がおぶつて渉るのだ。よしか。犬市こりや面白い。さあ来い、さんなむめで。猿市りやんごうさいりやんごうさい。と、片手で拳を打ちながら、兩方から左の手を出し、互に拳を打つ手を握り合ひ、犬市さあ勝つたぞ、勝つたぞ。猿市え、いま、しい。そんならこの風呂敷包を貴様一緒に背負はつせへ。それ、よしか。さあ来い、さあ来い。と、支度して背中を向ける。彌次郎これは有難いと猿市におぶされば、猿市は連の犬市と心得て、さつさと川へはいり、難なく向ふへ渉ると、此方の岸に残りたる犬市、犬市やい、猿よ、どうする。早く川を渉さぬか。猿市向ふの岸にて聞きつけ、腹を立て、猿市こりや冗談な奴だ。たつた今おぶつて渉したに、またそつちへ行つておれをなぶるな。犬市馬鹿あいへ。おのればかり渉つて、太い奴だ。猿市いや、太いとはそつちのことだ。犬市こりや、おのれ兄弟子に向つて言語道斷な。早く來て渉さぬか。と、白い目をむき出

さんなむめ。りやんごうさい。右の二語は拳を打つ呼聲で唐音の訛である。三、「むん」は不詳、「りやん」は二、「こ」は五、「な」は「さい」は添

冗談ふさけること。なぶる。からかふ。太い奴。横着な奴。言語道斷。以ての外。

し腹立つるゆる、猿市仕方なくまたこちらへ涉り歸り、猿市さあ、そんならおぶさりなさろ。」と背中を出す。北八、しめたと手を掛けておぶされば、猿市またさつさと川へはいり。犬市は大いに急きこみて、犬市「これ、猿市、どこに居る。」猿市、川の中に、猿市、いや、こいつは誰だ。」と、北八を川の中へどんぶり落す。北八、いや、助けてくれ、助けてくれ。」と、手足をもがき流れるゆる、彌次郎飛びこみ引上ぐれば、頭から骨までくさるほど濡れ、北八、座頭めが、とんだ目に遇はしやあがつた。」彌は、ま



(毛栗膝中道海東) リ 涉 川 井 鹽

しめた
がうまい、物事
やうになつた
時にいふ語。

づ着物を脱ぎやれ、絞つてやらう。」北全體彌次さんが悪い。何のおぶさらずとも宜いことに、お前が手本を出したから、ついおれも。」彌川へはまつたか、氣の毒な。は、ま、ま、それで一首やらかした。はまりけり目のなき人と侮りし

むくいひは早き川のながれに。

北え、聞きたくもねへ。よしてくんな。あ、寒い。」裸になり、がたく、震へながら着物を絞る。この内、座頭は川を涉り行き過ぎる。彌こ、で干しても居られめへから、着換を出して着やれ。どこぞで火を焚いて貰つてあぶるが、い。」北え、いま、しい。風を引いた。はあくつしやみ。」と、ぶつ、小言をいひながら、着換を出して着換へながら、くさつた着物は絞つて引提げ、出掛けると程なく掛川の宿に至る。(東海道中膝栗毛)

掛川
濱松の東約八
里。

一六 靜寛院宮

樹下快淳

明治元年正月、鳥羽伏見に於て俄に起つた砲煙の渦巻は、政權を返上して忠良な一臣民の列に退き、徳川氏の覇業を見事に閉ぢた筈の十五代將軍に、朝敵の汚名を與へました。征東總督の任命、三軍の進發、それと同時に、慶喜討つべし、江戸城屠るべし、徳川の社稷は根絶すべし、との大太鼓が、瞬く間に日本の隅々にまで響き渡りました。既に動亂の渦巻が京都に起つた以上は、江戸の府城が無事であり得ないのは勿論であります。三百年の間全國の富を壟斷し、十五代の間天下の勢を集めてゐた徳川氏は、恰も風前の燈火のやうな運命に陥りました。何れの史書にも、明治元年四月十一日、江戸城の明け渡し、談笑の間に行はれた、と書いてあります。そして、この時その事に携はつて、江戸と江戸市民とをして禍害を免れさせ、我が國を累卵の危さ

樹下快淳 兵庫縣の人、明治十六年生、文部省新史料編纂官、鳥羽伏見山城國、京都の南方、この月薩長二藩の兵と幕軍とが戦つた。政權の返上、慶應三年十月。十五代將軍徳川慶喜。征東總督有栖川宮職仁親王。三軍の進發、東海・東山・北陸の三軍に分れて進發した。

天
喜
い
奴
娘



から救つた大立物は、官軍方の參謀西郷隆盛と、幕府方の謀臣勝安房との二人であつたことは、殆ど誰知らぬ者はありません。けれども、その裏面に於て、強くて優しい靜寛院宮の尊いお力が加はつてゐたことを忘れてはなりません。靜寛院宮は孝明天皇の御妹で、弘化三年閏五月、雲深い九重に御誕生あそばされましたが、その時は既に父帝仁孝天皇が崩御された後でありました。生れながら父帝の尊容を御存じなかつたことが、宮に取つては終生消えやらぬ深い御歎でありました。

西郷隆盛 號は南洲、鹿兒島の人、明治十年歿、年五十一。
勝安房 名は安房、號は海舟、江戸の人、伯爵、明治三十二年歿、年七十七。
靜寛院宮 和宮親子内親王、明治三十年御年三十。
孝明天皇 第百二十一代。
弘化 仁孝・孝明兩天皇の年號。
仁孝天皇 第百二十代。

宮は御年六つの時から、有栖川宮と御許嫁の間であらせられまし
たが、一つには幕府の懇請やみ難く、また一つには兄帝の叡慮を休
め奉るため、心ならずも徳川家茂に御降嫁あそばされたのは、既に
大きな犠牲の御門出でありました。

住み馴れし都路出でて今日いく日、

いそぐもつらき東路のたび。

文久元年の末つ方、秋闌な木曾の山路を踏み分け給うて、都戀しさ
の御情を年若いお胸に抱きながら、外つ國人の徘徊するといふ、聞
くも恐ろしい江戸の地へお下りになりました。

宮が始めて幕府の御降嫁懇願をお聞きあそばされた時、さて、
驚き入りまゐらせ候。御そば御はなれ申上げ、遙々まゐり候事、誠
に心細く、恐れ入り候へども、幾重にも御断り申上度。との勅答書を
上られたのは、誠に御無理のないことでありました。しかし、程經

有栖川宮
熾仁親王。

徳川家茂
第十四代將
軍。

住み馴れし
宮の御詠。

文久
孝明天皇の年
號。(五三二一三
五三)

皇女
壽萬宮。

觀行院
橋本經子、大
納言、慶應元年
(二五三三)薨。

君のため
惜しまじな君
と民とのため
ならば身は武
藏野の露と消
ゆとも。(宮
の御詠)

木曾のかけは
し
旅衣ぬれまさ
りけりわたり
行く心も細き
木曾のかけは
し。(宮の御
詠)



徳川家茂

て後、兄帝が萬一の場合には、たゞお一方の幼弱な皇女を妹君の代
りにお立てあそばされようとの御覺悟であることをお知りあそ
ばされて、消え入るばかり驚かせられ、直ちに御生母觀行院を以て、

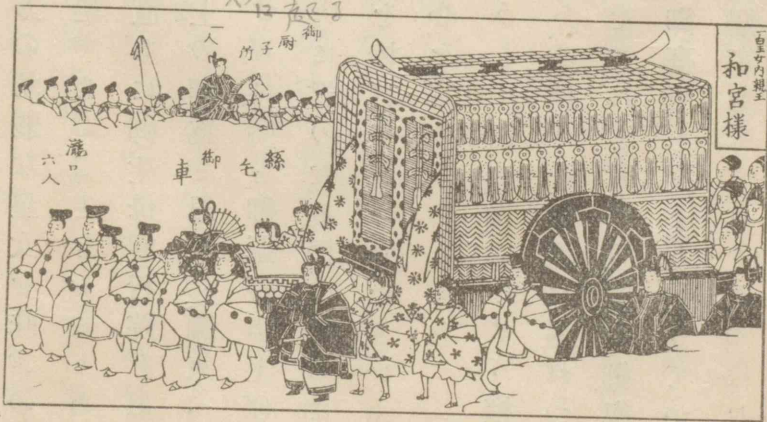
「御上の御爲と思召し、關東へ成
らせられ候」と御返答申上げて、
こゝに君のため民のために一
切を捧げて悔いなきといふ御
決心を定められました。
かうして宮は、御いや／＼様な
がら、心細くも御涙に濡れつゝ、

木曾のかけはしをお渡りになりましたけれども、一旦玉の御輿を
江戸城の大奥に運ばせられて、將軍の御臺所と定まり給うてから
は、天授の御麗質の上に毅然たる御覺悟が加へられて、あつはれ將

軍の妻として日月の如くあたりをお照らしになりました。前將軍家定の御臺所であつた天璋院家茂の生母實成院、この兩夫人に對せられては孝道の誠を捧げられ、夫君にお事へあそばされては、純潔白梅のやうな貞操の道を以てせられました。

宮と將軍との御成婚の大典が舉げられてから、江戸では坂下門の事變が起り、京都では伏見寺田屋騒動が勃發したのを始として、様々の重大事件が次に起りました。

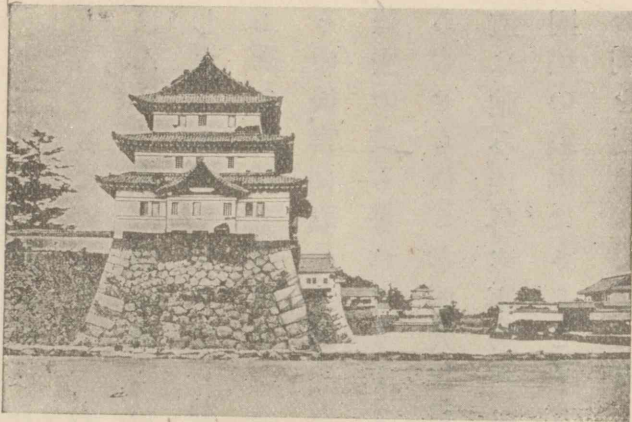
慶應元年五月、將軍家茂は長州親征と



下東御宮院寛静

坂下門の事變
文久二年正月
水戸浪士等
が坂下門で老
中安藤信正を
襲うた事變を
寺田屋騒動
諸藩の志士が
津久光を江戸
に上洛の途に
京都に擁護し
事起さうと

天璋院
名は篤子、島
津齊彬の女、
明治十六年
歿、年四十九。
實成院
岡田氏。



いふ重大な任務を帯びて江戸城を出發しました。この時、宮は氷川神社や摩利支天に御祈願をおこめになつて、夫君の武運と戦勝

とをお祈りあそばされたばかりでなく、天神の御直裔にまします尊い御身を以て、親しく黒本尊にお百度をお踏みになり、果はお鹽絶まであそばされました。けれども、宮のこのお心盡し

將軍の遺骸をお迎へあそばされたのでありました。

着るとても甲斐なかりけり唐衣、
あやも錦も君ありてこそ。
あ、何といふ悲しい御歌でありませ

鎮した、久光は
の臣をためそ
宿所寺田屋に
遺はしたとこ
ら、遂に争と
なつて数名の
死者を出した
事變をいふ。
慶應
孝明・明治兩
天皇の年號。
(二五五—二五七)
黒本尊
江戸芝増上寺
に祀つてある
靈佛。

つていらせられました。が、今や徳川家は朝敵となり、一門滅亡・九族
誅罰の日が目前に迫りました。御身が逆賊の一門に列して徳川
家に殉ぜられるのは忠孝の道でなく、さりとて徳川家を去らせら

羈旅

すみなれし都路
出て今日幾日
そくもつらき
づまぢの旅
江上舟
繁りあふあし間
をおのが泊りと
やいり江につな
ぐ海士のつりぶ
ね

静寛院宮御筆蹟

羈旅
すみなれし都路
出て今日幾日
そくもつらき
づまぢの旅
江上舟
繁りあふあし間
をおのが泊りと
やいり江につな
ぐ海士のつりぶ
ね

て生死もまゝならず、進退これ谷まる悲境に立たれました。
大節に當つてその道を誤らず、大難に處して聊かも動じ給はぬ宮
は、明治元年正月二十一日、上臈土御門藤子を京都に遣はして、徳川

れるのは不
貞不義の名
を末代まで
も流される
ことになり
ます。宮は
こゝに至つ

家處分の寛典を請はせられました。宮の御親筆の歎願書には、後
世に當家朝敵の名を残り候事實に殘念に存じまゐらせ候。何卒
汚名を雪ぎ、家名相立ち候やう、私身に代へ願上げまゐらせ候。是
非官軍差向けられ、御取りつぶしに相成り候はば、私も當家滅亡を
見つゝ、長らへ居り候も殘念に候まゝ、屹度覺悟を致し候所存に候。
私一命は惜しみ不申候へども、朝敵と共に身命を捨て候事は、朝廷
へ恐れ入り候事と、誠に心痛致し居り候。といふ雄々しい御文句が、
麗しい御筆蹟で認めてありました。義を立て情を盡し、涙で洗ひ
血で染めた宮のこの御文を拜しては、鬼神でも泣かずにはゐられ
ますまい。既に數度の謝罪使が目的を達することが出来なかつ
たのに引換へ、この時には徳川家を寛大に處分すべき旨の朝意が
下されました。
そこで、宮は、慶喜は勿論、徳川一門の恭順と幕臣の鎮撫とのために、

日夜お骨折になりました。一方東海東山兩道から攻め寄せた官軍の先鋒に對しては、特使を差遣して進撃中止を歎願し、同時に、幾度か懇篤な諭達書を發して士民の動搖を誠められ、令旨を山王社に傳へて平和鎮靜の祈願を神に捧げられました。かうした宮の尊い御努力によつて、殺氣に満ちてゐた官軍の銳鋒も收まり、百萬の江戸市民の悲歎と絶望の叫も止んで、目出たい新日本の舞臺が展開されました。

江戸文化の潰滅と、全日本の大混亂と、未曾有の國辱、これが戊辰變亂の際に我が國家の當面した三大危機でありました。若しも當時宮が徳川家の人として江戸城にお出でになつてゐられなかつたらと假想すると、恐ろしい戦慄を感じずにはゐられません。孝貞雙美、婦道崇高な宮は、實に我が國の一大禍機を未然に防がれた烈婦であらせられたのであります。

戊辰
明治元年。

一七 信仰

釋 宗 演

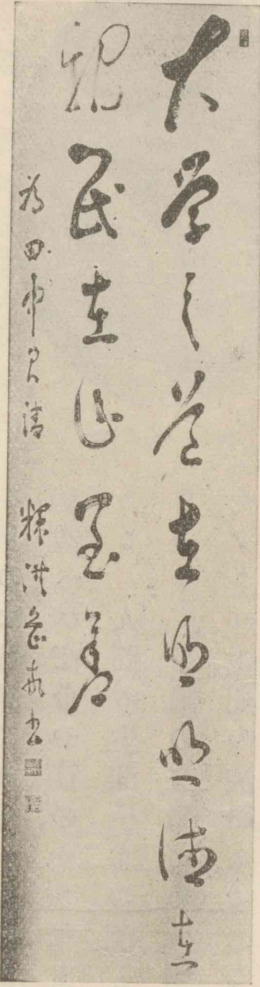


釋 宗 演

ドイツの詩人ゲーテは、信仰はあらゆる知識の極度である。』といつた。知識が行き詰つた時、眼前に横たはつて居る黒金の垣を突破して、眞理の寶藏に進み入ることの出来る智慧と力を與へてくれるものは信仰である。信仰はこれを譬へれば舟や筏のやうなものである。人間の生涯は、水の流と人の身の……と、謠の文句にあるやうに、たゞこれ生死の流である。この生死の流を渡る舟や筏が即ち信仰である。舟や筏がなければ海を渡ることが出来ないやうに、信仰がなければ人生の海を渡りおほせることは出来ない。普通に信仰といへば、單に慰安氣休めになるものぐらゐにしか解

釋宗演
俗名は一瀬常吉、福井縣の覺寺派管長、大正八年歿、
ゲイテ
(1749-1832)

されてゐないが、信仰は單に慰安・氣休めになるばかりでなく、人を活動させる大原動力となるものである。信仰は人に勇氣を與へる、活氣を與へる、獅子奮迅の勢を振り起させる。信仰を得た人は、恰も飢ゑた人が食を得たやうなものである。眞理の大寶藏に向



釋宗演筆蹟

つて向上の一路を驀進しようとする青年男女に、若し信仰がなかつたならば、所詮途中の障害物を突破することは出来ない。佛教では、信仰を稱して一に大覺といひ、大覺を得た人を覺者とも佛者とも稱する。大覺とは平易にいへば「さとり」である。自覺・覺他・覺

大學之道、在明明德、在親民、在止至善。
爲田中君、請釋洪岳敬書

行圓滿の境地に至つたのが覺者即ち佛陀で、佛陀になつたほどの人は、その信仰によつて眞理を徹見する力を有して居るから、決して知識の行き詰ることはないものである。向上の一路を驀進しようとする青年男女に信仰の必要な所以はこゝにある。あのゲートの言のやうに、信仰はいかにも知識の極度に相違はないが、これと同時に、また知識の端緒でもある。絶對や空想を排斥して、實驗を主とする今日の科學的研究法に於ても、その基礎となるものは信仰である。信仰がなければ辨異・統同を行ふことは出来ない、歸納も演繹も批判も出来ない。富貴も淫することが出来ず、貧賤も移すことの出来ない道徳的大勇猛心も、また信仰によらねばこれを得ることは出来ないものである。(叩けよ開かれん)

一八 言葉の味

五十嵐 力

富貴も淫、貧賤も移、能屈此之謂大丈夫。(孟子)
五十嵐力、米澤市の人、明治七年生、文學博士、早稲田大學教授

老農 丑氏の話である。

「日本の古言には、簡単な中に實に奥深い眞理を含んだものがある
ものですね。いつぞや、——もう二十年にもなりませうか、——海^{うま}
上胤平^{うまひら}と云ふ歌人が、高崎正風と云ふ人の歌を評した中に、高崎氏
の歌に、「牛牽^ひく云々。」とあつたのを答めて、「外國は知らず、我が國では、
昔から牛には追ふと言ひ來つたものであるのに、牛を牽くと云ふ
のは落着のない言葉遣だ。」と言つたのがありました。當時、私はそ
れを見て、歌人なんて暇つぶしに下らん事を言つて楽しんで居る
ものだと思つて、馬鹿にして居りましたが、其の後十數年経つて、は
つと思つた事がありましたよ。
それは斯う云ふ譯です。

或日、牛を一匹板橋^{いたばし}まで送つてやる用事があつて、一人の男に預け
て出してやりましたが、程なく走つて來て、「乞食橋の向ふまで行く

海上胤平
千葉縣の人、
歌人、大正五
年歿、年八十
八。

高崎正風
鹿兒島市の
人、男爵、歌
人、宮内省御
歌所長、明治
四十五年歿、
年七十七。



力 風 十 五

と、牛が坐り込んで、どうしても動かなくなりました。」と申しました。
「意氣地のない弱蟲だ。それではお前が行つて手傳つてやれ。」と言
つて、小力のある他の男を附けてやりましたが、暫くすると、それが
又歸つて來て、「二人でも、どうしても
立ちません。」と申しました。「馬鹿な
奴だ。二人がかりで牛一匹動かせ
ない奴があるか。それでは五平お
前行つてやれ。」と申しますと、五平は、
「情ない奴だな。それでは俺が一つ
立たしてやらう。」と言つて、威勢よく出掛けて行きましたが、暫くす
ると、それも又歸つて來て、「旦那、どうしても動きませんよ。今日は
どうかしたんですな。打つても、叩いても、引つ張つても、だまして
も、一寸も動きません。」と申しました。私は、可笑しいことだ、併し、俺

が行けばどうにかなるだらうと怪しみながら、動物に對する飼主の威光と、男共には多少優つた一日の長とを頼みにして、急いで行つて見ますと、なるほど牛の奴が道の真中に大磐石と腰を据ゑて居り、廻りには眞黒に人だかりがしてゐました。それから私は三人の男に手傳はして、撻つたり、あやしたり、いろ／＼工夫をして見ましたが、どうしても一寸も動かすことが出来ませんでした。困りぬいて茫然として居りますと、人だかりの中に、半纏を着て股引を穿いた馬方らしい六十恰好の爺さんが居りましたが、旦那、それでは動きますまいよ。私が一つやつて見ませうか。』と言つて呉れました。『それは有難い、是非に。』と言つて懇ろに頼みますと、爺さんは私の手から鼻綱を取つて、靜かに牛の右側に立ちました。右の手に持つた綱を伸ばして、牛の尻邊を軽く打ちながら、しつ／＼と申しますと、大磐石の牛が忽ち一身振ひして、むつくりと起き上

りました。それから、爺さんは後の方に立つて、尻を打ちつゝ、二三度圓く引廻しましたが、やがて三四十間追つて行つて、『さあ、斯うして後から追つていらつしやい。もう大丈夫です。』と言つて、綱を渡して呉れました。

私は厚く禮を述べて此の爺さんと別れましたが、此の時、電光のやうに私の頭に浮んで來たのは、例の海上氏の言はれた、牛には、『追ふ』と云ふ古言でありました。私は古學には一向不案内ですが、古い大和言葉の中には、いくらも、斯う云ふ風に、祖先が幾百年の經驗を結晶させて、三四字の中に不動の眞理を疊み込んだものがある事でありませう。言葉の味は實にえらいものですね。

私は此の老農の話**をば**、賈島が推敲の話よりも、應舉が猪のしゝの話よりも、觀世大夫が木賊刈の話よりも、フローベルが一語説よりも、更に面白く更に意味が深いと思ひ、もたすにもたされな

賈島 支那唐代の詩人。
應舉 圓山氏、江戸時代後期の畫家、寛政七年(一四三〇)没、六十三。
フローベル 佛國の小説家。(1871—1880)

忘する事にした。(八重葎)

一九 風 鈴

大谷 繞 石



大 谷 繞 石

嘗て或人の贈つてよこした半鐘形の支那渡來の鈴のあることを
 思ひ出して、これを風鈴に造
 つて、座敷の廂に吊した。い
 い音を出す。
 庭はこなひだ草せむしりしたば
 かりだから、せい／＼して居
 る。まんべんなく打水する。
 それから行水を遣つて、廣袖
 の浴衣を着て、縁に出て、ぼんやりと庭を眺める。暮れるにはまだ
 早い。風鈴がちり／＼と涼しさうだ。

大谷繞石
 名は正信、
 江市の人、
 治八年生、
 文學者、廣
 高等學校教
 授。

店の内はいつも打水に濕つた石敷、中央に場所の割合には大きな
 泉水があつて、池には金魚が幾匹か尾を重さうに緩く振はせて泳
 いで居る。岩の小島には、その島の幅の三倍もの高さのある鐵製
 の鶴が立つてゐて、頭の頂點から高く水を噴き上げて居る。白い
 大理石の圓テーブルTableに對つて、雪白のエプロンApronを掛けた少女の持

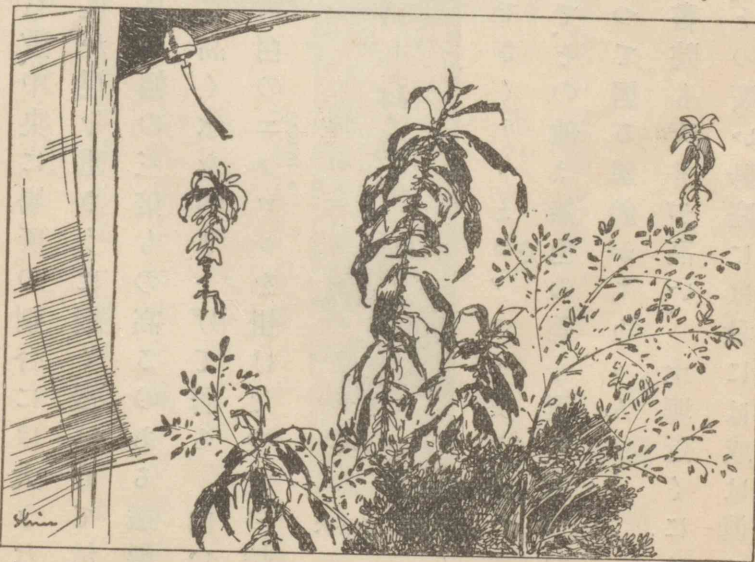


大谷繞石筆蹟

山醉に下りし
 麓や心太
 繞石

つて來た氷水の堆い氷を、銀匙でさく／＼とコップへ突き入れる。
 波に千鳥の模様を青い硝子玉で、その他は無色の硝子玉ゴキで造つた
 廂の淺い簾の外の吊葱つりしゆから下つて居る風鈴がちり／＼。
 町中とはいへ、寺のことだから書院も天井が高い。土塀近くには
 躑躅つづじ萩などが植わつて居るが、その廣い砂庭には、秋には或は眞つ

黄に或は眞つ赤になる葉雞頭がすい／＼と立つて居るだけ。本堂の蔭になつて居るので、日の光は當つて居らぬ。その書院に、大方は飛白の單衣の若い男が七八人、勝手な處へ革座蒲團を持つて行つて、それに胡床をかいて、ぢつと庭に見入つて居るもの、立膝を両手で抱へて眼を塞いで居るもの、腹這になつて頻りに手帳に何か書きつけて居るもの、その姿態は人さまざまだが、誰一人口を利かぬ。



(筆也 審部 渡) 鈴 風

學生の俳句會でもあらうか。時折のそよ風に、塀際の躑躅・萩の葉が揺れ、葉雞頭の莖が動く、同時に軒に吊した風鈴がちり／＼ちり／＼ん。

い、月だと、更けた月を雨戸一枚繰つて眺める。空は水のやうだ。月は折から庭の青桐の梢に懸つて居る。或一枚の廣葉の蟲の喰つた穴が大小二つ判然と見える。近處は寢靜まつて居る。この長早に涸れもせぬ門川の濼々たる瀬音も、こゝ裏庭にゐては音が弱い。時折蝸に似た河鹿の朗かな聲が川の上手に聞える。無いやうだが葉を揺ぶるほどの風はあると見える。廂の風鈴も微かにちり／＼ん／＼と鳴る。(北の國より)

二〇 田舎の夏

廐にはこと／＼と

川路柳虹

川路柳虹
名は誠、東京
市の人、明治
二十一年生、
詩人。

暗闇に聴く馬の足音、
繇瓜の棚を漏る月は、
野風呂の槽の水に散る。

野良から歸つた家の人、
厨にいぶる夕餉の火、
蚊遣の煙も渦巻いて、
いぶせき軒に這ひまどふ。

海ぞひの村のひとつ家に、
都のがれて七日すぎ、
はるかな夜の波の音を
聴きつゝ、今日も母に文かく。



二一 茅が崎から

美濃部多美子

先日はお手紙で私のことをお察し下さいまして、誠に有難く存じ上げます。あのやうにお心にお掛け下さいますのですから、不養生をいたしましては相濟まぬことに存じます。腦の故障のやうで、轉地するやう醫者から勧められましたので、此處に参りました。山の静かな所をとも存じましたが、勝手にいたしますのには、こちらが都合も宜しく、松の風などの騒がしさにも馴れて居りますし、植ゑて置きました萩や笹なども懐かしくて、參つて見ましたら、體の調子も大變宜しくなりました。凡そ一箇月ほごになります、この分なら次第に快くなることと存じますから、どうぞ御安心遊ばして下さいませ。折々申上げますやうに、あなた様のお歌集は手から離さないで、始終拜見いたして居ります。先日来、藥を用ひねば眠られぬ厭

茅が崎
神奈川県高座
郡。美濃部多美子
故男爵菊池大
麓の女、法學大
博士美濃部達
吉の妻、東京
府の人、明治
十九年生。

な晩ばかり續きました。そんな時、お歌を思ひ出して誦したり、
 忘れた歌があるので御本を取出して拜見いたして居つたりし
 ますと、藥などで無理に眠つたりするよりせれぐらゐ慰められ
 るか分りません。かう書きたてますと、何だかわざとらしく思
 はれませうが、本當に嬉しいことでございます。そればかりで
 なく、同じ時代に生れ合せたかひに、お手紙をいたゞいたりお目
 にかゝつたりすることの出来ますのを、非常に光榮に存じて居
 ります。(中略)

多分九月まで此處に居ることと存じます。きりくすが晝間
 草の中で鳴いて居りますが、松蟲はまだ鳴きません。
 きたない書きざまをいたしました。お許し下さい。匆々。

二二 應仁の暗雲

朱儒^{しゆじゆ}入道を討つて功のあつた山名持豊入道宗全は、顔色が朱のや
 うに赭^{あか}かつたので、世に赭入道と呼ばれてゐた。四職^{ししやく}では赭入道、
 三管領^{さんくわんりやう}では細川勝元、この二人が最も勢を振つてゐた。時の將軍
 足利義政^{あしかがよしまさ}は大英雄か大痴漢か、亂れ行く
 世を餘所にして、茶よ能よとの風流三昧、
 萬民の膏血を絞つて夜宴の燭に注いだ
 果は、所謂德政の暴政に自ら法を亂すの
 だつた。さらでもの世の亂は彌が上に
 も亂れくへて行くばかりで、遠い地方は
 いふに及ばず、都大路の眞晝間に、盜賊野
 武士の憚もない高晒^{たかあそび}、流離の民は一揆^{いっぺん}を起して、哀訴の鐘を打鳴ら
 すのだつた。世も既に終に近づいた氣配と見えた。
 この間に、犬の細川、猿の山名、互に牙を磨いて相争ひ、延いては將軍



足利義政

朱儒入道 赤松満祐、身長が四尺に足りなかつたから世人はこれを朱儒入道といつた。
 山名持豊 文明五年(三三三)没、年七十。
 四職 室町時代に侍所の所司に互に補せられた山名・京極・一色・赤松の四家の稱。
 三管領 室町時代に代る代る管領職となつた斯波・畠山・細川の三家の稱。
 細川勝元 文明五年没、年四十四。
 足利義政 延徳二年(二二五)没、年五十六。
 將軍家の云々 義政の弟義視と子義尚と。

家の家督争、搗かてて加へて畠山＊斯波＊兩家の家督争、かくて十有一年
に互る未曾有の大亂——應仁の亂は育まれたのだ。

畠山＊政長と同じく義就＊との御靈林＊の決戦によつて、この亂の幕は
開かれた。二人は互に家督を争うて、彼は細川勝元を、此は山名宗
全を後楯に頼んだ。將軍義政は、兩軍相闘うて雌雄を決せよ。諸
將のこれを援けることを許さず、と命じたけれども、宗全は密かに
義就を援けて勝たせた。あはれ勝元の馬鹿正直。

細川殿は洲＊股川＊殿と呼ぶぞよき、

尾張を苦しむるはこの川ぞ。

と京童は取沙汰した。政長は尾張守だつたのだ。勝元は切齒し
て憤り、さらば、とて兵を集めた。諸國の兵集るもの實に十有六萬
人。室町御所＊を乗取つて、その四足門に旗を樹たてた。これに對す
る宗全の兵は、その勢十有一萬と註された。今日は某殿の御着陣

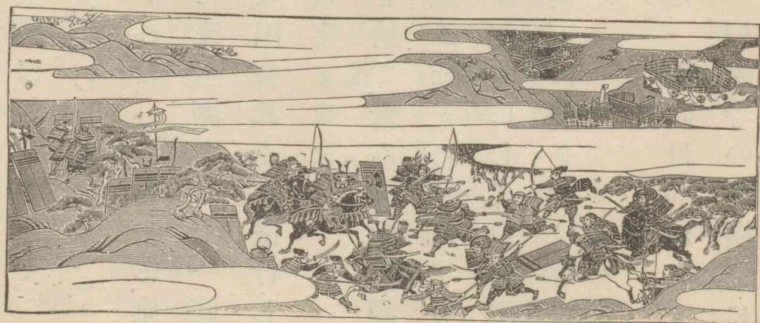
畠山云々 畠山政長と同
義就と。同
斯波云々 斯波義廉と同
十有一年 應仁元年(三三
七)から文明九
年(三三九)ま
で。
畠山政長 畠山持國の兄
持富の子、持
國の養子、細
川勝元に黨し
た。
義就 持國の實子、
山名宗全に黨
した。
御靈林 京都上京。
洲股川 今の長良川、
當時は濃尾の
境界をなして
ゐた。
室町御所 室町殿、花
満が室町に起
居た新館、皇

ぞ。」「明日は某國の勢が上り来るぞとよ。」「某殿は何れの手ぞ。」「某
國は東の手か西の手か。」「築地＊の蔭、辻の角、かうした噂がおどく
と恐怖に襲はれた老幼の耳から耳へと囁かれた。打物の影、旗の
影、日毎に入り来る諸國の人馬は、都の内外に充ち満ちた。一條二
條の大路、小路には、東訛＊筑紫訛＊蠻音荒らかな田舎武士が横行して、
掠奪を恣まにしては、殺虐の血にその鬚面を頰ほ笑ませた。
洛中今は上を下へとどよめいて、民は皆家を捨て、營みを棄て、調度
を負ひ、弱きを扶けて、右往左往にさまよひ惑ふほどに、戦は早くも
戻橋＊の畔＊に開かれ、矢叫の聲、鬨の聲、花の都は忽ちにして血煙渦卷
く修羅の巷となつた。そして、日毎々々に家々は焼き拂はれて行
つた。

兩軍は相國寺＊を中心として毎日々々戦うた。戦の目的がどこに
あるかをも忘れて、たゞ戦のために戦うた。相國寺の杉樹立に降

戻橋 一條通堀川に
架した橋。
相國寺 足利義滿創
建、京都五山
の、臨濟宗
山。相國寺派大本

る蟬時雨が血のやうな晚霞に喧しからうが、五條の橋の擬寶珠の上に月が澄まうが、比叡の頂に雪が降らうが、賀茂川沿の柳が芽ぐんで春風に靡かうが、烏丸殿の焼跡に鬱金櫻が咲き亂れようが、高倉御所の殘礎に草が萌えようが、六條磧の礫に秋風が白く立たうが、燕が來ようが、雁が歸らうが、委細お構ひなしで、毎日々々鬨の聲と攻鼓の音で明かし暮らした。初のほどは畠山政長、大内政弘などの間に可なり手痛い戦もあつたが、後にはたゞ申譯だけの欠まじりの矢叫に、戯のやうな小競合が十一年間も續けられた。



(起緣堂如眞都京) 亂の仁應

烏丸殿
所、一條の御所、
室町殿、義政
の居館、烏丸
今出川の北に
あつた。
高倉御所
中御門堀川東
にあつた。

大内政弘
義興の父、相
伴、宗全の時
山名宗全を助
けた。

仁和寺
京都府葛野郡
花園村一帯を
いふ。

朱雀御門
大内、南面、
正門、二條大
路、三門の中
央。

兵燹日夜都の空を染めて、高倉御所烏丸殿を始として、仁和寺の四十九院、嵯峨野の四十八院以下の神社、佛閣も皆灰燼に歸してしまつた。見渡す限りの焼野原、雨暗く降りしきる夜など、燐火が青くさまようて、死骸を漁る瘦犬の聲が物凄く聞えた。あゝ、變り果てたこの様よ！猿樂の宵は鼓に更けて、門の牛車の轅に眠る小舎人の頬に櫻をふぶく朧月のその春の佛はどこへ消えたか。紅紫の被衣の隙から美しい眉を匂はせながら、女童など引具して行き交ふ上臈の姿も見られねば、朱雀御門の朝風に轡を並べて興じ行く衛府の人々の華奢な姿も見られない。御所の侍の飯尾六左衛門尉は、その老顔に昔の佛を浮べつゝ、黯然として涙を呑むのだつた。

なれや知る都は野邊の夕雲雀、

あがるを見てもおつる涙を。



銀閣寺

實に恨は萌え出る草の緑
とともに徒に長う、夕雲雀
のあがるのを見ても、落ち
る涙は禁め得ない。

大英雄か、大痴漢か、相國寺
の激戦の際には、餘燄が花
の御所の檐端に渦卷いた
が、義政はなほうたげの杯

花の御所
室町御所

を置かなかつた。この大亂を眼の前に見ながら、そして、自分がこ
れを收拾すべき當面の責任者でありながら、知らぬ顔して歡樂の
夢に耽つてゐた。琅玕の柱、翡翠の帳、金銀珠玉を鏤めた銀閣寺の
美觀と、所謂東山時代の藝術とは、この勇敢な享樂家の手によつて、
炎と血との間から得られた記念なのだ。(歴史小品血煙)

銀閣寺
本稱は慈照
寺、臨濟宗、
京都洛東の北
偏淨土寺町に
ある。
東山時代
足利義政の時
代、國運は衰
微した。が、
衛工藝が發達
し、名人巨匠
が輩出した。

二三 阿新丸

さるほどに、君の御企圖を申し勧めけるは、源中納言具行、右少辨俊
基、日野中納言資朝なり。各、死罪に行はるべしと評定一途に定ま
りて、まづ去る年より佐渡國へ流されておはする資朝卿を斬り奉
るべしと、その國の守護本間山城入道に下知せらる。

このこと京都へ聞えければ、この資朝の子息邦光の中納言、その頃
は阿新殿とて、歳十三にておはしけるが、父の卿囚人になり給ひし
より、仁和寺邊に隠れて居られけるが、父誅せられ給ふべきよしを
聞きて、今は何事にか命を惜しむべき。父と共に斬られて、冥途の
旅の伴をもし、また最後の御有様をも見奉るべし。とて、母に御暇を
ぞ乞はれける。

母御頻りに諫めて、佐渡とやらんは人も通はぬ怖ろしき島とこそ
聞ゆれ。日數を経る道なれば、如何にしてか下るべき。その上、汝

君 後醍醐天皇。
具行 元弘二年(一九
二)歿。
俊基 藤原氏、元弘
二年歿。
資朝 藤原氏、元弘
二年歿。
去る年 正中元年(一
二四五)

にさへ離れては、一日片時も命存なからふべしともおぼえず。」と泣き悲しみて止めければ、よしや伴なひ行く人なくば、如何なる淵瀬にも身を投げて死なん。」と申しける間、母、いたく止めなば、また目の前に憂



(筆齋容池菊) 朝資野日

き別もありぬべしと思ひ侘びて、力なく、今までたゞ一人付き副ひたる中間を相副へて、はるばると佐渡國へぞ下されける。

もなければ、履はきも習はぬ草鞋に、菅の小笠を傾けて、露分くる越路の旅、思ひやるこそあはれなれ。都を出でて十日あまりと申すに、越前の敦賀の津に着きにけり。これより商人船に乗りて、ほどな

路遠けれど、乗るべき馬

く佐渡國にぞ着きにける。人して斯うといふべき便りもなければ、自ら本間が館に至りて、中門の前にぞ立ちたりける。折節僧のありけるが立ち出でて、「この内への御用にて御立ち候か。また如何なる用にて候ぞ。」と問ひければ、阿新殿、これは日野中納言の一子にて候が、この頃斬られさせ給ふべしと承りて、その最後の様をも見候はんために、都より遙々と尋ね下りて候。」といひもあへず、涙をはら〜と流しければ、この僧心ありける人にて、急ぎこのよしを本間に語るに、本間も岩木ならねば、さすがあはれにや思ひけん、やがてこの僧を以て持佛堂へ誘ひ入れて、踏た皮ひ行は纏き解かせ、足洗ひて、疎かならぬ體ていにてぞ置きたりける。

阿新殿、これを嬉しと思ふにつきても、同じくは父の卿を疾く見奉らばや。」といひけれども、今日、明日斬らるべき人にこれを見せては、なか〜よみぢの障ともなりぬべし。また關東の聞えも如何あ

らんずらんとて、父子の對面を許さず、四五町隔たりたるところに置きたれば、父の卿はこれを聞きて、行末も知らぬ都に如何あらんと思ひやるよりもなほ悲し。子はその方を見やりて、浪路遙かに隔たりし鄙の住居を思ひやりて、心苦しく思ひつる涙は更に數ならずと、袂の乾くひまもなし。これこそ中納言のおはします牢の中よとて見やれば、竹の一むら茂りたるところに堀掘りめぐらし、塀塗りて、行き通ふ人も稀なり。なさけなの本間が心や、父は禁牢せられ、子は未だ幼し。たとひ一所に置きたりとして、何ほどの怖かあるべきに、對面をだに許さず、まだおなじ世の中ながら、生を隔てたる如くにて、亡からん後の苔の下、思ひ寝に見ん夢ならでは、相見んこともありがたしと、互に悲しむ恩愛の父子の道こそあはれなれ。

五月二十九日の暮ほどに、資朝卿を牢より出し奉りて、遙かに御湯

も召され候はぬに、御行水候へ。」と申せば、はや斬らるべき時になりけりと思ひ給ひて、嗚呼、うたてしきことかな。我が最後の様を見んために遙々と尋ね下りたる幼きものを一目も見ずして果てぬることよ。」とばかり宣ひて、その後は曾て諸事につきて言葉をも出し給はず。今朝までは氣色しをれて、常には涙を押拭ひ給ひけるが、人間のことに於ては頭燃^つを拂ふ如くになりぬと覺りて、たゞ顯密の工夫の外は餘念ありとも見え給はず。夜に入れば、輿さし寄せて乗せ奉り、こゝより十町ばかりある河原へ出し奉り、輿昇きするたれば、少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直りて、辭世の頰を書き給ふ。

五蘊假成^シ形^ヲ 四大今歸^ス空^ニ
將^{モツテ}首^ヲ當^ラ白刃^ニ 截斷^ス一陣風^ノ

年號、月日の下に名字を書きつけて、筆を擱^{さしか}き給へば、斬手後へ廻る

とぞ見えし、御首は敷皮の上に落ちて、體はなほ坐せるが如し。このほど常に法談などし給ひける僧來て、葬禮式の如く取營み、空しき骨を拾ひて阿新に奉りければ、阿新これを一目見て、取る手もたゆく倒れ伏し、今生の對面遂に叶はずして、變れる白骨を見ることよ。」と泣き悲しむも理なり。

阿新未だ幼稚なれども、健氣なる所存ありければ、父の遺骨をばただ一人召使ひける中間に持たせて、まづ我より先に高野山に参りて、奥の院とかやに納めよ。」とて、都へ歸し上らせ、我が身は勞はるこゝとあるよしにて、なほ本間が館にぞ留りける。これ本間が情なく父を今生にて我に見せざりつる鬱憤を散ぜんと思ふ故なり。かくて四五日經けるほどに、阿新晝は病のよしにてひねもすに臥し、夜は忍びやかに抜け出でて、本間が寢處など細々に窺ひて、隙あ

らばかの入道父子が間に一人刺し殺して、腹切らんずるものをと
思ひ定めてぞ狙ひける。

或夜雨風烈しく吹きて、宿直する郎等どもも皆遠侍に臥したりければ、今こそ待つところの幸よと思ひて、本間が寢處の方を忍びて窺ふに、本間が運や強かりけん、今夜は常の寢處を變へて、いづくにありとも見えぬ。また二間なる處に燈の影の見えけるを、これは若し本間入道が子息にてやあらん、それなりとも討ちて恨を散ぜんと、抜け入りてこれを見るに、それさへ爰にはなくして、中納言殿を斬り奉りし本間三郎といふものぞたゞ一人臥したりける。よしやこれも時にとりては親の敵なり、山城入道に劣るまじと思ひて、走り掛らんとするに、我は元來太刀も刀も持たず、たゞ人の太刀を我が物と憑みたるに、燈殊に明かなれば、立ち寄りばやがて驚き合ふこともやあらんずらんと危みて、左右なく寄り得ず、如何せん

と案じ煩ひて立ちたるに、折節夏なれば、燈の影を見て、蛾といふ蟲の數多明障子に取付きたるを、すはや究竟くわいぎやうのことこそあれと思ひて、障子を少し引きあげたれば、この蟲數多内へ入りて、やがて燈を打消しぬ。今は斯うと嬉しくて、本間三郎が枕に立ち寄りて探るに、太刀も刀も枕にありて、主はいたく寢入りたり。まづ刀を取って腰にさし、太刀を抜きて胸元に當て、寢たるものを殺すは死人を殺すに同じければ、驚かさんと思ひて、まづ足にて枕をはたとぞ蹴たりける。蹴られて驚くところを、一の太刀に臍の上を疊までつと突き通し、返す太刀に喉笛さし切りて、心靜かに後の竹原の中にぞ隠れける。

本間三郎が一の太刀に胸を通されてあつといふ聲に、番衆も驚きさわぎて、火を點してこれを見るに、血のつきたる小さき足跡あり。さては阿新殿の仕業なり。堀の水深ければ、木戸より外へはよも



日野阿新丸 (齋藤松洲筆)

出でじ。搜し出でて打殺せ。とて、手にく、松明を點し、木の下、草の
蔭まで、殘るところなくぞ搜しける。

阿新は竹原の中に隠れながら、今はいづくへか遁るべき。人手に

掛らんよりは、自害をせばやと思は
れけるが、憎しと思ふ親の敵をば討
ちつ。今は如何にもして命を全う
して、君の御用にも立ち、父の素意を
も達したらんこそ、忠臣孝子の義に
てもあらんずれ。若しやと、一まづ
落ちて見ばやと思ひ返して、堀を飛
び越えんとしけるが、口二丈深さ一
丈に餘りたる堀なれば、越ゆべきやうもなかりけり。されば、これ
を橋にして渡らんよと思ひて、堀の上に末靡きたる吳竹の梢へさ

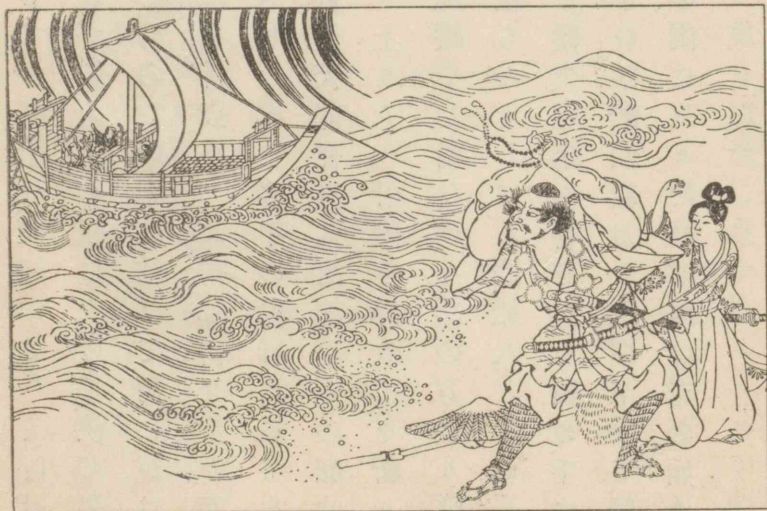


(筆齋容池菊) 丸新阿野日

らさらと登りたれば、竹の末堀の向ふへ靡き伏して、やすくと堀をば越えてけり。夜は未だ深し、湊の方へ行きて、船に乗りてこそ陸へは着かめと思ひて、辿る浦の方へ行くほどに、夜もはや次第に明け離れて、忍ぶべき道もなければ、身を隠さんとして日を暮らし、麻や蓬の生ひ茂りたる中に隠れるたれば、追手どもとおぼしきものども、百四五十騎馳せ散りて、若し十二三ばかりなる兒や通りつる。」と、道に行き逢ふ人毎に問ふ音して、ぞ過ぎ行きける。

阿新その日は麻の中にて日を暮らし、夜になれば湊へと志して、そのことも知らず行くほどに、孝行の志を感じて、佛神擁護の眸をやめぐらされけん、年老いたる山伏一人行き逢ひたり。この兒の有様を見て痛ましくや思ひけん、これはいづくよりいづくをさして御渡り候ぞ。」と問ひければ、阿新事のさまをありのまゝにぞ語りける。山伏これを聞きて、我この人を助けずば、只今の程にかはゆき目を

見るべしと思ひければ、御心安く思召され候へ。湊に商人船ども多く候へば、乗せ奉りて、越後、越中の方まで送りつけ進らすべし。」といひて、足たゆめばこの兒を肩に乗せ背に負ひて、程なく湊にぞ行き着きける。夜明けて、便船やあると尋ねけるに、折節湊のうちには船一艘もなかりけり。如何せんと求むるところに、遙かの沖に乗り浮べたる大船、順風になりぬと悦びて、櫓を立て、篷を捲く。山



(車者勇今古) 山伏と丸新阿

伏手を舉げて、その船これへ寄せてたび給へ、便船申さん。」と呼ばはりけれども、曾て耳にも聞き入れず、船人聲を帆に上げて、湊の外へ漕ぎ出す。山伏大きに腹を立て、柿の衣の露を結びて肩にかけ、沖行く船に立向ひて、いらたか數珠を押し揉みて、「持祕密咒、生々而加護、奉仕修行者、猶如薄伽梵」といへり。況や多年の勤行に於てをや。明王の本誓誤らずば、權現、金剛童子、天龍夜叉、八大龍王、その船此方へ漕ぎ返してたばせ給へ。」と、跳り上り、肝膽を碎きてぞ祈りける。行者の祈神に通じて、明王擁護やし給ひけん、沖の方より俄に惡風吹き來りて、この船忽ちに覆らんとしける間、船人どもあわて、山伏の御坊、まづ我等を御助け候へ。」と手を合せ膝を屈め、手に手に船を漕ぎ戻す。汀近くなりければ、船頭船より飛び下りて、兒を肩に乗せ、山伏の手を引き、屋形の内に入りたれば、風は元の如くに直りて、船は湊を出でにける。

その後、追手ども百四五十騎馳せ來り、遠淺に馬を控へて、あの船とまれ。」と招けども、船人これを見ぬよしにて、順風に帆を揚げたれば、船はその日の暮ほどに、越後の府にぞ着きにける。阿新山伏に助けられて、鰐の口の死を遁れしも、明王加護の御誓いちじるかりけるしるしなり。(太平記)

二四 現代俳句抄

薦からみ藤からみ松の風騒ぐ。

河東碧梧桐



蹟筆桐梧碧東河

河東碧梧桐
名は乘五郎、
松山市の人、
明治五年生。

酔ひきめて戻
る土筆のあれ
ばつくし摘む
碧

兩岸の若葉迫りて舟早し。

高濱 虚子

西瓜太郎躍り出でよと割つてけり。

沼波 瓊音

藝ありて輪卒召されぬ月の陣。

巖谷 小波

秋雲入 夏はこれ 待たぬ 舟

巖谷小波筆蹟

汐水拾ふ浦の日和や冬の海。

藤井 紫影

海驛に泡吹く馬や雲の峰。

松瀬 青々

牡丹の花びらをゑがく餘念なや。

萩原 井泉水

秋の蚊の刺さんとしては刺さんとする。

大谷 繞石

泊りおくれ枯野急げば鐘が鳴る。

佐藤 紅緑

勿體なや祖師は紙子の九十年。

大谷 句佛

まよふかきもよきよし
あなたと 句佛

大谷句佛筆蹟

二五 我が父母

我物の心を辨へしよりこの方のことは覚えしに父が日々のこと

新井 白石

新井白石
名は君美、江戸の人、江戶時代前期の政治家、學者、享保十年(三十三)歿、年六十九。父名は正濟。

なみだもろき
我もあなたと
時鳥 句佛

佐藤紅緑
名は治六、前市の人、明治七年生。明弘
大谷句佛
名は光演、前眞宗大谷派管長。

藤井紫影
名は乙男、兵庫縣の人、明治元年生、文
帝國大學京大
松瀬青々
名は彌三郎、大阪府の人、明治二年生。

越雲の吳雲と
夏を相聲ゆ
小波

巖谷小波
名は季雄、東京市の人、明治三年生。明東

沼波瓊音
名は武夫、名古屋市の人、昭和二年歿、年五十一。

ことなり。」と仰せられて、大きな灸を、その數少からず、五所も七所も一時にすゑさせて、痛ませ給ふ氣色も見え給はず。身靜かなる時には、常におはします所を淨く掃ひて、壁上に古畫をかけて、花瓶には春秋の花を少しく挿みて、それに對して黙坐して日を消し給ひ、また自ら繪かき給ふこともありき。それも色をまうけたる繪などをば好み給はず。

身の病み給ふ時より外は、人をめして使ひ給ふといふことなく、何事も皆手づからなし給ひたりき。朝夕の物をめすことも、飯は二碗を過ぎず。「手して碗をさゝぐるに、その輕重によりて飯の多き少きは知れぬれば、その餘物は飯の多少によりて多くも少くも食ひて、常に我が腹に滿つる分量を過すべからず。口にかなふものなりとも、一色をのみ多く食ひぬれば、必ずそのために傷めらるゝことあり。何物をも選ばずして皆々少しづつ食ふ時は、必ず相制

するところあるにや、食のために傷めらるゝことは少しと覺ゆるなり。」と仰せられき。

世の常には、こなたより參らするものをめして、何物を參らせよと宣ひしことはあらず。たゞ「四時の新味をば、その出で來りし初に、何物に限らず參らせよ。」と仰せられて、家人と共に聞召しけり。

酒は僅かも喉に下し給はば、大きに酔ひ給ひしかば、たゞ盃を把りて歡を受け給ふのみなりき。茶をば好みてめしけり。身にめしけるものも、家におはする時は、洗ひ濯すすぎしものをもめしけれど、垢づきぬるをば、いね給ふ時もめすことなく、門を出で給ふに至つては、必ず新しく鮮かなるものをめす。それも身におひ給はぬ品のもの用ひられしことはあらず。「むかし人は、常に身死しなん後の見苦しからぬやうを心にかけてしなり。」など宣ひたりき。扇子なども、人多き中に取りも落し遺おぼれもすることあり。これらのもの

にても、その主の心は推し量らるゝことなり。」と仰せられき。
我が母にておはせし人は、ものよく書き給ひしのみにあらず、歌の道をも傳へ習ひて、代々の集または物語のたぐひなど、我が姉妹に讀み教へ給ひ、圍碁將棊なども堪能におはして、これらのことをも我に教へ給ひたりき。香爐箱の中に琴の爪を袋にして入れおかれしを見しことあれば、これらのことをも好き給ひしにや。我が見まゐらせしよりは、織り縫ふことこそ女のわざなれ。」と仰せられて、年毎に美しき筋の布といろゝの文ある絹を、みづからも織り、人にも織らせ給ひ、それをお父にもめさせまゐらせ、我にも賜はりしが、今も少しは家に残り。賤しきものの言葉に、似たるものの夫婦とはなるなり。」といふことのあるが、物宣ひ、爲し行ひ給ふことども、父にておはせし人にたがふところなくて、ぞおはしましたりける。父の致仕し給ひし後には、これも髪おろし給ひて、佛の道

賤賤賤

いみじく行ひ、六十三にて終り給ひき。(折り焚く柴の記)

自修文

二六 思出の一節

三角錫子

二十一歳で女子高等師範學校を卒業した私は、すぐ札幌に赴任した。その後の五年間は、只單に職務の遂行者であつたといふに過ぎなかつたが、明治二十九年六月、旅行中の父の突然の他界は、眞に私の覺醒を促した。父は最初私が札幌へ赴任する時、母を伴なはせてくれた。随つて、弟どもも母と一緒に來てゐた。そして、私の義務年限の終るまで、父は一人で暮らしてゐてくれた。父の方へ歸らうとすれば學校で引止められるので、父に郡長を辭職して札幌へ來て貰ふことにした。その途中、津輕海峽を渡る船中で、腦溢血に罹つたのである。その時、傍にゐたものは十七歳の弟だけだ

三角錫子 石川縣の人、常磐松女學校長、大正十年、年五十、札幌女子小學校訓導として赴任した。遂行者 父とける人。名は風三。他界 死去。覺醒 さめること。郡長 静岡縣に奉職してゐた。腦溢血 腦中の血管が破れて血液が溢れ出る病氣。

つた。五年間の不自由な獨棲^{どくせい}を忍んで、愈^{なほ}今日こそ久しぶりに妻
子に逢はうといふ楽しい日の朝、不幸にも急死したのだつた。
子煩悩^{こぼんぼう}だつた父は、子供こそ萬金にも換^かへがたい寶と思つてゐた



子 錫 角 三

はすぐ私の顔に注がれた。十七歳十五歳十歳七歳の四人の弟も
姉ばかり見てゐた。私の眼から落ちる一滴の涙は、家内中の涙を
誘つた。私には泣くべき自由さへもなかつた。何を考へる間も
なく、悲みに沈んで居る私の耳には、子供は必ず大學へ入れたい。」と

獨棲
一人で暮らす
こと。

子煩悩
子を非常に愛
すること。
遺産
残る財産。

嫡男
相續をする男
子。
長弟
名は茂喜。

四人の弟
工學士 愛三
醫學士 康正
法學士 武雄

緊張
ひきしまるこ
と、はりつめ
ること。

義絶
勘當。

繰返^{くりかへ}していつた父の聲だけが鮮かに響いた。私は何とも言ひ知
れない力に滿身の緊張^{きんちやう}を覚え、あらゆる自分の希望を捨てて、生活
の道に働いた。しかし、何をいふにも二十五歳の女の腕で、いかに
物價の安い時とはいへ、生活の樂^{たのしみ}な筈はなかつた。力を合せるべ
き長弟には、骨身^{ほねみ}を削^けられるやうなことばかりされた。
次いで私の暗黒時代が始まつた。それは五年間の不幸な結婚生
活を送つた涙の時代だつた。只泣くより外はどうすることも出
來ない苦しい、時代だつた。長弟は遂に義絶^{ぎぜつ}せねばならなく
なつた。寄宿舎生活の外には、一日とても別れ住んだことのない
母とさへ、一緒に暮らすことが出來なくなつた。浮世が厭^{いと}はしか
つた。全く死にたかつた。幾度書置^{かきお}きを書いたか知れなかつたが、
母や弟のことを思ふと死ねなかつた。死ぬ自由を有つて居る人
が羨^{うらやま}しかつた。

かゝる境遇から脱れて、漸く母の許に歸ることが出来て、久しぶりに母子兄弟打揃つた時の嬉しさよ、楽しさよ。けれども、長弟の義絶が母に扶助料を受ける資格を失はせたので、生活は益々苦しく、五年の間、虐待使した體に一日の休養を與へる暇もなく、すぐまた教職に就いた。かうして、まあ嬉しやと思つたのは、たつた二箇月、五月二十八日の地久節に着るべき私の紋附を縫ひ返したのを最後に、母は病の床に臥した。この時の住居は東京の牛込中里町だつた。この邊は、その頃は、一步足を踏み出すと早稲田田圃だつた。毎日眞夜中に病人の汚れ物を持つて、その田圃を流れる小川に洗濯に行つた。空は高く澄んで、北斗七星が鮮かに見える時だつた。洗濯を終へると、跣足のまゝ、小川の岸に腰掛けて泣くのが、夜毎の仕事の一つだつた。自分の不運を歎くよりも、幼くてまた一人の親に死別せねばならない弟達が可愛さうだつた。高等學校に入學

扶助料
官吏などの死
後政府からそ
の遺族に給與
する金子。
虐待
むごく使ふ。
五月二十八日
昭憲皇太后の
御誕生日。

したばかりの弟の前途も遠かつた。どう成り行くかと思ふと、出るものは只涙だけだつた。皆の眼は父の死んだ時よりも一層私の眼を追ひ廻した。私の一滴の涙は家中を洪水に浸した。私は泣くにも泣けなかつた。自由に泣くことの出来るのは、只早稲田田圃の眞夜中より外にはなかつた。私ども同胞五人の心盡しの看護も祈念もその効がなく、八十歳の老母と四人の男の子とを私に託して、母は遂にこの世を去つた。一家は全く途方に暮れた。今までは、私は男のやうに働きさへすればよかつた。弟達の世話はいふまでもなく、私の着物までも母が縫つてくれた。今からは、私は父であり母であり男であり女であらねばならなくなつた。そして、一圓に一斗六升の米は、六升になつた。小學生の弟は中學校に入學した。家賃の安い處へくと轉々として移らねばならなかつた。恐ろしい人生の旅路に安

祈念
いのり。

住の地を得ないぐらゐ悲しいことがあらうか。病氣の弟が病院通ひをする都合のために、駿河臺すまがたいに引越した時などは、そこに一人の知人もないので、荷車を外に待たせておいて、空家の掃除にかゝり、やつと片付いたかと思つた時には、もう日が暮れて、再び何をすゝる勇氣も出なかつた。お蕎麥そばで夕飯を済ませて眠に就いたものの、二疊・三疊・四疊半の小さい家の内を見渡し、こんな弱い姉を力に、もう安らかな夢を結んで居る弟達の寝顔を眺めて、氷のやうに冷たい堅い胸を抱いて泣き明かした夏の夜が思ひ出される。「狐には穴あり。空飛ぶ鳥には巢あり。されど、我には枕する所なし。」といつた〔基督〕キリストの歎なげに比べれば何でもないとはいへ、その時は身も世もない心地だつた。

一人の弟は、高等學校を退學して、徴兵に出て、そのまゝ軍人にならうか。といつた。もう一人の弟は、商店に奉公しようか。ともいつた。

駿河臺
區。東京市神田

「四人も弟をかゝへてゐないで、一人二人は養子にやれ。」と、或人に勧められた。また、一人を養子にくれ、ばあとの兄弟の學資を出してやらう。」と熱心に望む人もあつたが、それも斷つた。たゞ斷念だんねんされぬのは、弟は残らず大學へ入りたい。」といふことばかりだつた。行ける所まで行かうと、弟二人に同時に第一高等學校の入學試験を受けさせた。知人が呆あきれ返つて愛想あいせうをつかしたのも無理はない。愈、在學證書を出す時になつて、保證人になつてくれてがない。「自分の努力で合格することの出来る入學試験は何でもないが、保證人は自分の力では作ることが出来ない。」と、弟達は泣いた。却つて一家の事情を全く知らない方々が保證人になつて下さつたので、やつと入學することが出来た。

こんな生活も、母の存命中は忍ぶのにも張合はりあひがあつた。母亡なき後の我が家の淋しさよ。同胞は只冬の夜の罌ねんごの鳥のやうに小さく

斷念
思ひ切る。

固まつて、互に暖め合うてゐた。口にこそ出さね、皆の心を襲つて来る淋しさはどうすることも出来なかつた。それでも、私には、こんな人生流離の巷からでも、旅路とはいへ、父母と共に住んだ数々の思出が美しい繪卷のやうに展開するが、私と共に放浪する四人の弟達には、どんな思出があらう。繰繰げられるどの繪もくく定めて淋しいく切れくなものだらう。(婦人生活の創造)

二七 細川忠興の北の方

湯浅常山

細川忠興の北の方は明智光秀の女なり。父謀反の時、忠興にむかひて申しけるは、「父ながら、かゝる企事よくあるべしとも思はれず。瀧川柴田など申す人々多ければ、必ず軍敗れ候べし。女の浅き智慧にも口惜しくこそ存じ候へ。男の身ならんには、鎧の袖に縋りても諫め申すべきを、力なし。君若し與せさせ給ひなば、世の譏い

流離 さすらふこと
展開 ひらく
放浪 さすらふ

湯浅常山 名は元禎、岡山藩士、江戸時代後期の儒者(二四)歿、年七十四
細川忠興 藤孝の子、信長・秀吉・家康に歴仕した正保二年(三二)歿、年八十二
北の方 光秀の第三女、慶長五年(一六〇〇)歿

かでか遁れさせ給はん」と、涙に沈まれしかば、忠興、光秀に同心なかりけり。



(フラグヒサア)妻の興忠川細の劇

その後程経て、石田、西國の諸將を語らひて兵を起す時、諸大名の北の方を大阪城中に取入れんとするを、北の方聞きて、傳に付けられし河喜多石見稻留伊賀、小笠原正齋を呼びて、我こそを出でんこと思ひも寄らず、城中に取籠められんは恥辱なり、よく断を申し候へ。なほ聞き入れられずば、これを限りと思ひ定むべし」と語られしかば、正齋、殿、東國に向はせ給ひし時、思ひかけざることのあらんには、正齋計らひて、武將の恥な晒

瀧川柴田 益・柴田勝家
石田 名は三成

取籠 籠 傳

取籠 籠 傳

取

しそ。』と仰せおかれ候ひき。敵若し奪ひ取らんとするならば、その時思召し切らせ給へ。』といひけり。かゝるところに、城中に入れよ。』と使を以ていはせしかば、再三斷の旨を述べけれども、聞き入れず。七月十七日の未の刻ばかりに、大阪の軍兵五百餘、玉造口の屋敷を取捲きて、疾く城中に入れ申されよ。さらずば亂れ入りて奪ひ取らん。』と呼ばはりけり。女房ばらあわてて泣き悲しめども、北の方は騒ぐ色もなく、かくあらんとはかねて思ひ設けつることぞ。正齋介錯せよ。我生ける世にまみえざりし人々に、死しての後も見られんは快からじ。』とて、面に覆面打掛け、括袴着て、刀を抜き、胸に突き立てたりければ、正齋、眉尖刀にて介錯し、そのまゝ、そこにて腹を切らんとせしところに、正齋が小姓走り來り、北の方と同じ處に自害あらば、後の謗も候べし。』といひければ、正齋、餘りの痛ましさに忘れたるよ。』とて、障子の外に走り出

七月十七日
慶長五年。
未の刻
今の午後二時
頃。
玉造口
大阪城東南

括袴
括袴
括袴

で、家に火を懸け、石見と共に腹切りて、炎の中に死にたりけり。さて、北の方はかねて形見とや思ひけん、手ずさみのやうに書き捨てて、硯箱の中に入れおかれし歌あり。

先立つはおなじ限りの命にも
まさりて惜しき契とぞ知る。

後に至りて取傳へて世に残りぬ。(常山紀談)

二八 現代女流の和歌

九條武子

また更に新しき世の待つ如く、

心いさめり病いえゆくに。

戀りすまに波は洗へり人の子は

また戀りすまに足跡をつく。

九條武子
男爵九條良致
の妻、京都市
の人、明治二
十年生、歌人。

ひさしをいそぐあふもあかき
小まのうきをわくあまの庭小武子

蹟筆子武條九

霜解にかわきを追ひて道の上に、
惜しき早咲の花こぼしけり。

山田邦子

霜解のかわきを追ひて道の上に、
白き筋ひき子等の遊べる。

よもぎ汲みかきくさる木根花
海も浮きて春の志を邦子

蹟筆子邦田山

杉浦翠子

ひとはかきく
あはれきく
小十の庭
か草あめ
にや武子の庭

山田邦子
本名は今井
枝、政市、今
井、健彦の妻、
長治野縣の妻、
明治二十三年
生、歌人、三
年

よべ汲みしく
花許だも浮き
すて春ゆかむ
邦子

杉浦翠子
實家杉浦非水
の妻、埼玉縣

みんなみの枝にすなはち花多し、
陽あたる庭の白梅の花。

あふるしはのまつ、ねふり
あかきましろき拾ひ得し

蹟筆子翠浦杉

荒磯にあかきましろき拾ひ得し
貝の重みに垂れゆくたもと。

二九 良寛の遺蹟

相馬御風

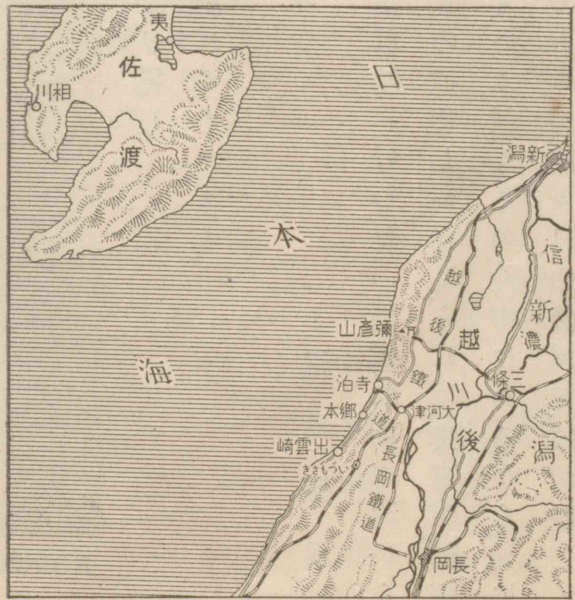
私は案内者を得て、寺泊から出雲崎へ行つた。出雲崎は寺泊から海岸に沿うて歩けば四里ほどの道程しかなく、それに、良寛が歸國當時假の宿りを求めた郷本といふ村もその途中にあるから、私はその道を取らうと思つたのであるが、前々日の暴風で、道がひどく

の人、明治二十三年生、歌人

淺間おろし吹
きつわがさ
松原にわがさ
しくればまつ
風をきく
翠子

相馬御風
名は昌治、新潟縣の人、明治十六年生、文學者
寺泊
新潟直江津間の海岸にある町。
出雲崎
寺泊の西南。
良寛
越後國の僧、天保三年(一八三二)没、年七十四。
歸國
二十餘年間中國・九州を行脚して寛政十一年歸つた。

壊れて居るといふので、已むを得ず汽車で行くことにした。寺泊で長岡鐵道に乗り、大河津で越後鐵道に乗り換へ、そこから四つ目の驛が出雲崎である。しかし、出雲崎の町は、驛から北へ山一つ越えた一里先にあつた。私達は、先方へ約束しておいた時間にあつたので、そこから更に人力車に乗った。道は車に乗つて居るのが却つて苦しいほどの山道だつた、眼の下に谷合の村を見て通るやうな處もあつた、今にも倒れさうに突つ立つた崖の下をびく／＼しながら通るやう



大河津
寺泊の東南。

な處もあつた。

さういふ道を通りながらも、私の想像裡には、時々、そのあたりの道をとぼ／＼と辿つて居る一人の托鉢僧タクハツソウの姿がちらついて見えた。

出雲崎*にしへ人もふみにけん

道をたどりてわれは行くかも。

かういつたやうな事もしみ／＼感じられた。

こんな風にして、ほど一時間も過ぎたかと思つた時、車はある小山の端を廻つた。と、その刹那、私達の眼の前に、突如として、海——
廣々とした海が展開した。その刹那の驚きと快さとは、全くいつて見やうのないものだつた。私は思はず感歎の聲を發した。佐渡の島山は、こゝでは、今まで私がどこで見たよりも鮮かに美しく見えた。

荒海や佐渡によこたふ天の川、

出雲崎
この文の作者
の歌。

かう芭蕉^{*}の歌つたのも、こゝであればこそと思はずには居られなかつた。

出雲崎の町はすぐ眼の下にあつた。つい先頃焼けたばかりの焼

鐵齋作



(筆齋鐵岡富) 良 僧

跡を中央にして、東西に一本長く長く伸びた眼下の港町は、私の眼にはたまらなく懐かしく見えた。我が良寛の生れた町、我が良寛の育てられた町、そして我が良寛の剃髪した町。

坂を下つて出雲崎の町に入つた私達は、まづその知人を訪ね、その案内された部屋は、海の中へ

芭蕉
松尾宗房、
賀國の人、
江戸時代、
俳人、
元禄七
年(一七〇〇)
十一月
歿

てゐた。廣々とした海の眺、翠に浮ぶ佐渡の島も、ゐながら見るこ

とが出来た。

古にかはらぬものはありそみと

向ひに見ゆる佐渡が島なり

天も水もひとつに見ゆる海の上

浮び出でたる佐渡が島山。

かうした良寛の歌がおのづと口吟まれるのだつた。私はやゝ暫

く窓に凭れて、眞夏の日に照らされて居る海を眺めてゐた。

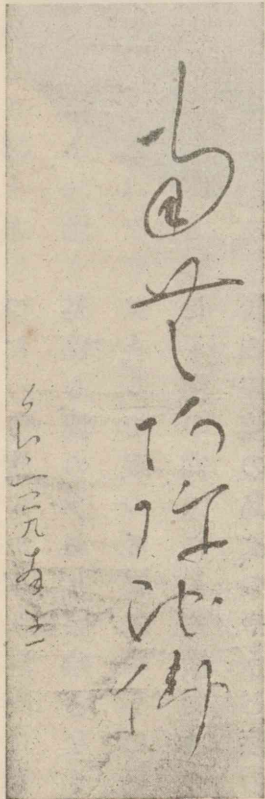
港内には、僅か

二三艘の小さ

な荷積和船の

外、何物の影も

認められなか



蹟筆 寛良僧

南無阿彌陀佛
良寛拜書



彌 彦 山 遠 望

つた。見渡すかぎり、港内にも、港外にも、波のうねりは殆どなく、海はまるで眠つて居るやうに見える。海に向ふに長く横たはつて居る佐渡の島は、ちやうど夢の中で見る山のやうだつた。右の方には、遠く突き出た岬の上に、高く彌彦（彌彦）の山が端麗な姿を現してゐた。凡べては静かだつた。夢のやうだつた。しかし、かうした静けさの中にあつても、私はいつとはなしに、秋から冬へかけての日本の荒れ模様を思ひ合せずには

彌彦山
寺泊の北方にある火山、麓に彌彦神社がある。

居られなかつた。そして、それと同時に、今かうして夢のやうな静けさの中に浸つて居るこの町の、その頃の物凄さや淋しさをも想像しないでは居られなかつた。

こんなことを思つて居る中に、私の心は、やはりいつの間にか、良寛その人への聯想を喚び起して、私が今對して居るこの自然を、朝な夕な見つゝ、育てられた彼の少年時代乃至青年時代の初期のことなどを頭に浮べてゐた。ふと、間近の波打際で、ばちや／＼泳いで居る五六人の子供の群が眼に止まつた。私は、彼等の中にも、少年時代の良寛の倅を求めた。そして、口碑を思ひ合せて、幼い頃から他の子供と交ふことをあまり好まなかつたといはれて居る少年榮藏（榮藏）が、たゞ一人群から離れて、ぎら／＼と日の照る岩の上に坐つて、ぼんやり海を眺めてゐた姿を空想に描いたりした。

榮藏
良寛の幼名。

たらちねの母がみ國と朝夕に、

佐渡が島べを打見つるかな。

またしても良寛の歌が思ひ出された。彼はさうした懐かしさを以て、朝夕に、あの夢のやうに見える佐渡の島山を眺めつゝ、更にその島を舞臺にした古來の様々な時代的犠牲者の悲劇について、とりとめのない空想を描きながら、いつまでも磯邊に立ち盡してゐたことだらう。また雪と嵐と浪とが凄じく荒れ狂ふ冬の日などには、終日薄暗い家の内に閉ぢ籠つて、深い瞑想に耽りながら時を過したことだらう。私はそんなことを様々に想像しながら、旅館の夜の更けて行くのも忘れてゐた。(天愚良寛)

三〇 留守中に來りし人の許に

植口一葉

人に誘はれ小ひして一夜佇りにこの島鎌倉をと珍しく蝸牛の殻を出ての處まのみ立帰り留守居の女より聞きたる「昨日

植口一葉
名は夏子、
梨縣の明人、
學者、
二十九年、
治文二年

の午後由車にりて美りき嬢様おけし、まゝ留守なる由申せしに「然らば又」とりて立帰り遊ばせられしが所土産はこれ」とり美事なる一折差出して見せし、此の女田舎の親類の者より下女代りにと居らせたるは私宅にはまだ居る日の浅けり、たゞた極も御見知り申す仰せ置かれし、石前をさへ何時も忘れてあまた首のみ傾け居り「見上げたる所今年は二十歳ばり申東髪に高う遊ばされ申色白り如何にも美りき西方」と唯是ばり申し候まゝ私も考へつきんはす編物敷へまわらせたる子爵の姫君二方の中か然らずば例の参事官の内妹と知り候はるの年若う美りき人を送じては其の御名申し試みぬに「いないな、たにも候はず外はず」とり更に御人知れ難く困りて其のまゝ昨日は暮り今朝起き出でて嗽き、かうかうと申庭に秋海棠の美りく咲けるを

見出づらまう「あけれ秋海棠の花の籠きことよ懐けくもあ
りかな」と獨りこゝろひしに縁先近う帯を執りおし其の女
邊いき聲をきき「それよ一昨日の御方はこゝれ名に能く似
たまひなりき 何かいざうとやらん」と口疾く申しか「さうば
二階堂の君か」と言へば「まゝとに其の通り」と申すに手に持
つ楊枝取落しお笑ひをひき
二十歳ばかりとだに言はずばやがし御上とも思ひつくべきを「嬢
孫」と先づ言はれりかば唯年の若き人をのみ選り出して同じ
間きたる思かき、實に束髪に遊ばれを人の親とも思はざ
せ給ふまゝくこゝたる女が十九二十と思ひしは誤りもあらざる
べく後斯くを知りしよりいふ御目にかゝりし残念を、増り
てなを稀との古訪問に折忘しく不在を付たりけん 取返し
がたう口惜しう思はれ申し候 賜けり物今を水引を解きし心安

頂戴有難く御禮申し候 さらばとも萬一ともとに御用
なをにこの御入りまはあらざりしか 街道も近からず御事
多き内許様の例なまぬ御ありまはと考られぬまゝ御説
びかたし 歸京の内初らせ申上げぬ急なる御用事にゆげし
内郵書申遣はし下されたく所急ぎなまぬ内用にもゆげん
には何れ私近々に急上申すまゝ心得ぬまゝ其の折申中聞
け候あべくともまれ人定かになりしをきいてかこ

(二葉全集)

三一 狂歌

○

四方赤良

生酔の禮者を見れば大道を

横すぢかひに春は來にけり。

四方赤良
本名は太田
單號は南畝
蜀山人、江戸
の狂歌師、文
政六年(一八二五)
歿、年七十五。

早蕨が握拳を振上げて、
山の横面はる風ぞ吹く。
ほととぎす啼きつる跡に呆れたる
後徳大寺のありあけの顔。

跋筆良赤方大

すみだ川今は吾妻の都鳥
業平などは在五中將

跋筆住裏屋大

大屋裏住

郭公鳴つるか
たはみえねど
は有明の月
蜀山人
ほととぎす
きつる方をな
がむればたい
有明の月ぞい
れる。(後徳
大寺實定)
後徳大寺
藤原實定、左
建久二年(公
三〇)歿、年五
十
雨望月
てはるはずが
らけり物とぞ
中山のあめり
ち月あめの
裏住
業平
在原氏、阿保
親王の第五
將、元慶四年
五十六
大屋裏住
久須美氏、江
戸の狂歌師、
文化七年(公
七)歿、年七十
七
鯛屋貞柳
榎並氏、大阪
の俳人、享保
二十年(公三
九)歿、年八十
一
つむり光
之本名は岸誠
之、江戸の狂
歌師、實政八
年(公三三)歿、
年七十
宿屋飯盛
本名は石川雅
望、江戸の文
學者、文政十
三年(公七)歿、
年十八
天地の
力をも入れず
かして天地を
ぬ鬼神をも哀

鶯も蛙もおなじ歌なかま、
經よむもあり歌よむもあり。
富士の山夢に見るこそ果報なれ、
路銀もいらす草臥れもせず。

鯛屋貞柳

ほととぎす自由自在に聞く里は、
酒屋へ三里豆腐屋へ二里。
宿屋飯盛

つむり光

跋筆光りむつ

大屋裏住
久須美氏、江
戸の狂歌師、
文化七年(公
七)歿、年七十
七
鯛屋貞柳
榎並氏、大阪
の俳人、享保
二十年(公三
九)歿、年八十
一
つむり光
之本名は岸誠
之、江戸の狂
歌師、實政八
年(公三三)歿、
年七十
宿屋飯盛
本名は石川雅
望、江戸の文
學者、文政十
三年(公七)歿、
年十八
天地の
力をも入れず
かして天地を
ぬ鬼神をも哀

動き出してたまるものかは。



蹟筆盛飯屋宿

栗柯亭木端

世の中は何のへちまと思へども、

ぶらりとしては暮らされもせず。

朱樂管江

山里は散りし紅葉の錦をも

木綿ほごには思はざりけり。



蹟筆洲橋衣唐

唐衣橋洲

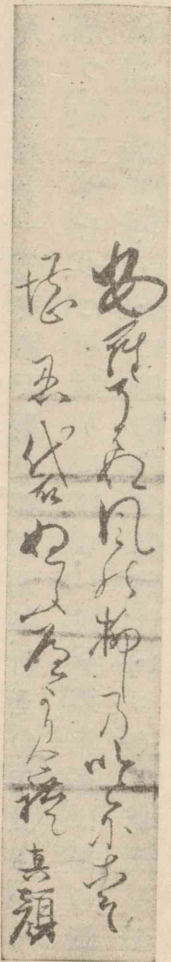
菜もなき膳に衰れは知られけり、

しぎやき茄子の秋の夕ぐれ。

鹿都部眞顔

争はぬ風の柳の絲にこそ、

堪忍袋ぬふべかりけれ。



蹟筆眞顔都鹿

馬場金埜

雪ならばいくら酒手をねだられん、

花のふゞきの滋賀のやまかご。

作者不知

れと思はしむるは歌なり。(古今集序文)

栗柯亭木端の俳人、大阪二年(四三)歿、年六十三。

朱樂管江本名は山崎景貫、江戸の狂歌師、寛政十三年歿、年六十三。

暮春露花散し木陰にやうぐいすの春聲

唐衣橋洲本名は小島泰歌師、享和二年(二六)歿、年六十。

菜もなき心なき身にも衰れは知られけり鴨立つ澤の秋の夕暮。(西行法師)

鹿都部眞顔本名は北川嘉兵衛、江戸の狂歌師、文政十二年歿、年七十七。

馬場金埜本名は大阪屋甚兵衛、江戸の狂歌師、文政四年歿。

泰平の眠をさますじようきせん、
たつた二杯で夜もねられず。

三二 一萬と箱王

頃は人皇第八十一代安徳天皇の養和元年、新玉の年立ちかへり、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上
にたはぶれながら、いかに、母御前、父御前は、いづくにおはしますぞや。その佛はいづくにましますぞや。往きて拜み奉らばや。母御前、いざさせ給へ」といひければ、遙かに忘れたる來しかたも、今更思ひいだされて、消え入るばかりに思はれて、母泣く／＼のたまひけるは、あの曾我殿こそおのれらが父にてあれ」と、心強くかたらひけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。
箱王重ねて申しけるは、父御前は、まことやらん、狩場より歸り給ふ



道にて、工藤一藤とやらんに射られ、死に給ひぬ」と、兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿のきりものにて、鎌倉より伊豆へくだる時

もあり、伊豆より鎌倉へのぼる時もありとや。われらをも殺さんとや思ふらん。われらがこの里に在りと知らずや過ぐらんなど、おとなしく語りければ、母より始めて、女房たちまで皆袖をぞ絞りける。

かくて、夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びあたるに、五つ連れたる雁がねの南をさして飛びけるを見て、一萬申しけるは、あれ見給へ、箱王殿空を飛ぶつばさも、皆別のつばさぞまじへざりける。五つ連れたる鳥のうち、一つは父、一つは母、三つは子どもにて、ぞあるらん。物いはぬ鳥類すらかくの如し。われらは人倫に生れながら、和殿は弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬことこそ

工藤一藤 名は祐泰。鎌倉殿 源頼朝。この里 相模國足柄下郡下曾我村。

悲しけれ われらが父
をば河津殿と申してあ
りきとかやぞ父だにも
世におはしまさば馬鞍
をも賜はり、弓矢をも持
ちて、今ぞ思ふやうに物
を射ありきなん われ
らより幼きものにて、



(筆重廣川歌) 弟兄我曾

馬鞍、弓矢をもて物を射ありくことの羨しさよ。これらのことども思ひ續くれば、いつより今宵は父御前の戀しくおはしますぞや。とて、袖に顔を差入れてさめぐと泣きければ、弟もこぞかしく顔をあはせて泣きあたり。一萬の乳母の女房これを聞きて「あな、あさまし、人もこそ聞け。いかに和上藤達、夜も更けぬるに、さやうに

河津殿
三郎祐泰。

てはおはするぞ。とくく入らせ給へ。」と怖ろしげにいひければ、二人のものは門外へ逃げ出でて、思ふやうに飽くまで泣きて後に内に入りけり。

或時、兄弟は竹の小弓に薄矧うすきりの小矢を取添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに、二人立向ひ、あなたこなたへ射とほして、一萬、箱王に申しけるは、「われらもいつか成長し、和殿十三、われは十五にだにもなるならば、いかならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如くさし合ひて射取りて、ともかくにもなりなん。和殿も弓よく射習ひ給へ、われも射習はん。弓矢は男の一の能にあるなるぞ。」といひければ、弟も打ちうなづきて領掌しけり。年ばへには怖ろしきことかなと人々思ひけり。
一萬が乳母このよしを聞き知りて、大きに驚きて、母にかくと申しければ、母も大きに仰天し、二人の子供を呼びよせ、泣くく語られ

けるは、まことか、おのれらがさも怖ろしき謀叛ムカブを起さんと議しあふなるは。もし人の耳に入りなばよかるべきか。おのれらが祖



(物語我曾) 弟兄我曾るみてれらせ制に母

父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を松河が淵に沈め奉りし故に、御敵となつて、先年伊東の館に於て失はれ給ひぬ。おのれらかゝる謀叛人の孫なれば、敵左衛門尉上の御敵に申しなして失はるべし。その時千たび百たび悲しむともかなふべきか。そのうへ、汝等が鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿なげき申してとゞまりたり。その故は、鎌倉殿石橋山の

伊東入道名は祐親。千鶴御前母は祐親の女。松河が淵伊豆國田方郡伊東にある。左衛門尉工藤祐經。

石橋山相模國足柄下郡。合戦は治承四年(一一八四)八月。

合戦に打負けて、土肥の杉山へ入らせ給ひし時、梶原景時と曾我殿と二人心をあはせて助け奉りし故に、駿河國八郡の大名になされしその御恩を皆返しまゐらせて、「二人の幼きものどもを助けて給はらん。」と申されければ、鎌倉殿憐ませ給ひて、「それほどの志ならば、二人の子供祐信に預くるぞ。」と仰せられける故にこそ、汝等も安穩にて今まで希有の命を保ちたるぞ。それにつきて、曾我殿の芳恩をば生々世々にも報じ盡すべきか。鳥類畜類にても恩を知るところを聞け、況や汝等人倫に於てをや。しかるを却つて曾我殿に歎を與へんこと、かへ



墓の弟兄我曾

土肥の杉山、土肥の山谷、石橋山の南。梶原景時頼朝の寵臣。

すがへすも口惜しかるべし。その恩を報ぜんと思はば、速に謀叛をとどむべし。」と、口説きたてて誠められければ、二人の子供目と目とを見合せ、顔打赤めて立ちにけり。

それより後は、人の聞かぬところにては内々談議しけれども、人目に顯れては語り合ふこともなし。母も内々怖ろしきものどもの心ざまかなと思はれければ、弟の箱王をば出家にせんとぞ思はれける。(曾我物語)

三三 京都の秋

水谷まさる

京都は私にとつて幼い時からのまだ見ぬ憧れであつて、奈良と共に懐かしい舊都として心の中に描かれてゐました。そして、それは、譬へば、破れた築地の蔭に、そつと花を咲かせる白芙蓉のやうにしつとりとした、落着いた、そして、物淋しい感じを起させずにはゐ

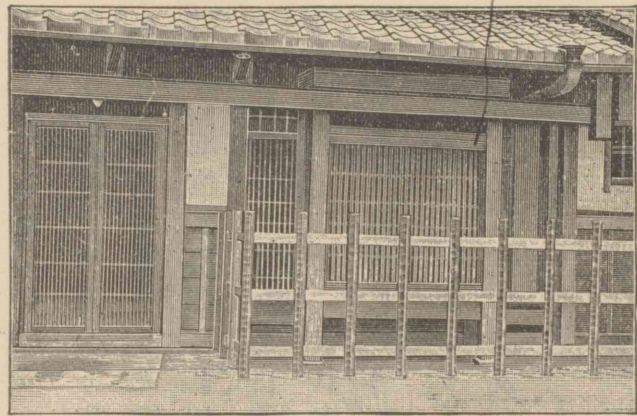
水谷まさる
名は勝、東京市の人、明治二十七年生、文學者。

ませんでした。

平安朝時代にすつかり組立てられ、それ以來はたゞ時の流のため洗はれてゐたやうな京都も、明治になつてからは、西京としての特殊な地位を獲得しました。が、それだけに、私は現在の京都のあまりな面裏れを見て、心に描いてゐた情調と遙かに相違するのにつかりしました。けれども、それは京都驛に下りた時の最初の感じで、四五日滞在して居る間に、私は残んの色香を尋ねる蝶のやうに、淋しがるといふよりは氣輕に、諦めるといふよりは強ひて求めて、現在の京都の中に僅かながらも残つて居る昔の俳を尋ね廻つたのでした。

たゞ斯うして尋ね廻つたところでは、やはり京都は白芙蓉のやうな、すつきりとしたところも、清らかなところも、落着いたところも、淋しいところも、みんな備はつてゐました。確かに京都は奈良と

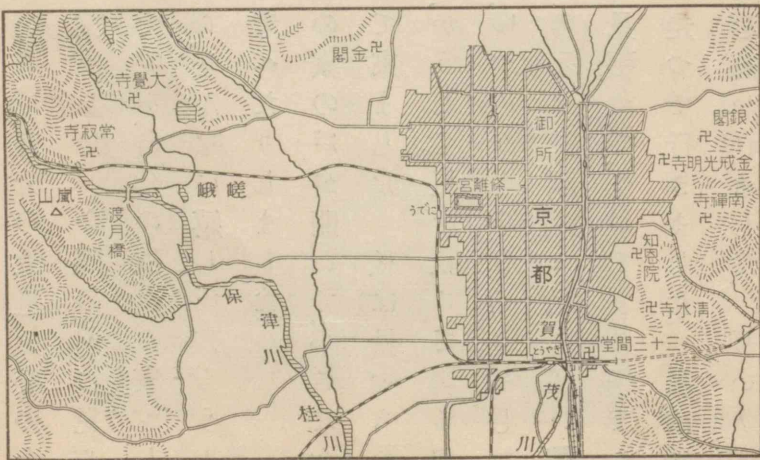
共に同じ母から生れた二人の姉妹のやうな氣がしました。たゞし私は奈良を小春日和の十月に訪れたのに引換へて、京都を時雨

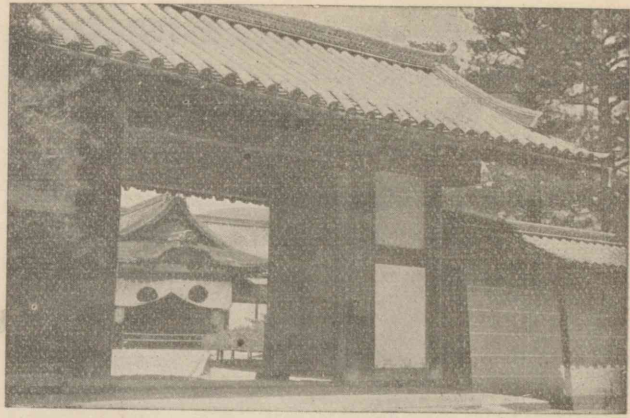


家 た も し の 都 京

の十一月半ばに訪れたので、京都の横顔にちつとばかり餘計に淋しさがあ
るのを見たかも知れません。
深く戸を鎖して、紅殻塗の格子造の窓
の中に、白い障子が嵌まつて居るひつ
そりした京都のしもた家を、町外れの
埃の立たぬ白い路のほとりに、ふと見
つけた時の嬉しさ。私はそつとその
家の前に立ち止まつて、窓の下にひよ
ろひよると生えた雑草が枯れかゝつ
て居るのや、戸口の鴨居にからくに

なつた柘ひしぎの小枝を挿してある何かの呪まじなひなどを、飽かず見守つたのでした。東京で生れ、東京を故里に持つ私は、育つにつれて、東京が自分の故里だとは思へなくなつて了ひました。荒らされ、踏みにじられ、他國の人達が入込んで來た東京には、どこに故里として懐かしく抱いて貰へるやうな氣持を見出すことが出來ませう。私の家は、京橋は木挽町びきりまちの元の伊達様の邸の中にありました。けれども、今は昔の俤は形ばかりもありません。かういふ不幸な私は、





大覚寺山門

きました。といつて、私は著名な佛閣に行つて、昔から残つて居る寶物を見たり、建築物の奏でる耳に聞えぬ音楽を心に聞いたり、古木の茂る庭を歩いたり、御佛に手を合せたりしたことを、決して詰らないといふのはありません。それらもどんなに嬉しいことだつたでせう。

でも、私は京都へ来る前に、餘りに多く奈良を見ました。私の頭では、奈良の匂と京都の匂とが雜つて了ひました。別に歴史的に學問的に比較したり研究したりする力のない私は、いつでも自分の印象にだけ縋つてゐました。きつとそのせゐだ

つたでせう。だから、私は最後に方面を變へて、嵐山へ行つた時のことを書いて、このおほざつはな旅行記の結びとしませう。

嵐山へ行く前に、私は嵯峨野を歩きました。大覚寺や常寂寺を見たり、しつとりとした竹林の道を歩いたりして居る中に、ちやうど竹の葉の細かい戦たたかぎのやうな、しめやかでひつそりした影が、私の心の上に落ちて來たのを感じました。それは何といふ落着いた嚴かな氣持だつたでせう。空には雲が飛んで、をり／＼時雨がほらほらと降つて來ましたが、私は時雨に濡れるのを厭ひもせず、少しぐらゐ道が遠廻りになつても構はないで、野道の細いのを選んだり、竹林の中の道を選んだりして、わざと廣い道を歩かないやうにしました。

遠い昔の夢が私の體の廻りにそのまゝ、残つて居るのです。私はそれを感じました。凡べて滅びて了ひましたけれども、此のあた

大覚寺 京都市の西郊
嵯峨村にある
眞言宗の大
常寂寺
大覚寺の西南
にあり、近
代創建の法
華道場

りの風物には、昔を思はせるだけの或物がありました。確かにさうでした。私は平安朝のことを色々と思ひ浮べました。けれども、ともすれば、私の空想はさつと降つて来る時雨の音に破られました。そして、私はその時雨の音の中に、公卿達の歎息の聲を聞くやうな気がしました。

嵐山に來た時、嵯峨野を歩いて來たために、餘計に今までの氣持が深められました。「櫻かざして今日も暮らしつ」と歌つた大宮人達の華やかな、ゆつたりした時代の蔭に、意地悪く忍び寄つて來た暗い運命の影、そのことが、より多く私の心を惹くのでした。

嵐山は川を控へて、すぐ眉に迫つて立つてゐます。對岸から見ると、いろ／＼な樹々に包まれて、花で彩られたよりも美しく見えました。「二月の花より紅なり」といふ詩の句もあります。それほど紅く綺麗な紅葉も澤山ありました。

櫻かざして
も、しきの大
宮人はいとま
あれや櫻かざ
らして今日も暮
らして(山部
赤人、新古今
集)

二月の花より
遠上三葉山石
徑斜、白雲生
處有人家ハ
停車坐愛楓
林晚、霜葉紅
於二月花(杜
牧)

渡月橋を視界に入れて嵐山と共に眺める景色は、餘りに知られ過ぎた景色だけに、眼新しいといふ氣持はないかも知れませんが、いかにもよく整つて美しいと思ひます。

私は飽かず嵐山を眺めました。川の水は清らかで、深く山の影が沈んでゐました。私はこゝまで書いて來ても、もう筆が思ふやうに進まなくなりました。私はむしろ嵐山で作つた詩を書いた方が、私の感じをよく表しはしないかと思ひます。「秋」といふ題で、嵐山にてといふ註を入れた詩です。

秋は今し流の上にあり。

淋しさ夕靄の裳裾を濡らし、

たゆたひつゝ、共々に流れ行くなり。」

秋は今し流の上にあり。

包みかねしかなしみを

渡月橋
嵐山の入口の
川にかけられ
た橋。

流と共に咽び泣くなり。」

おゝされど、秋は今し

わが胸ぬちのさゝやかなる

思の流の上にある。」

まことに私の思の流は、嵐山の下を流れる水と共に、秋に咽び泣いたのでありました。

も一つは、この嵐山を左に見て、川上の温泉場まで行く間を、船に乗つて行つた時の氣持です。題は「影」といふので、これもやはり「嵐山にて」といふ註をつけました。

静かなる棹あつかひに、船はひそ／＼水を滑り、

わが心もまた 船と共に緩やかに滑る。

水に影ひたすは 紅葉松櫻岩のたぐひ、

しんめりと影は沈み、流るゝ水に秋を淋しむ。

さて我が心、影の上を滑り、ひそ／＼と影を潜り、

尋ぬるは亡き人の なつかしき面ざし。

私は今かう書いて、ちつと眼を閉ぢて、當時のことを思ひ返してゐます。時雨の嵐山は言ひ換へれば影の嵐山でした。光の嵐山ではなしに、影の嵐山であつたことが、餘計に私の心を惹きつけるのでせう。

影！ 影！ 懐かしい影！ 私はいつまでも影を戀ひる人間であるでせうか。（夢と影）

自修文

三四 春日局

福地 櫻痴

こゝは城内御白書院にして、今日將軍家御息女和姫君御入内門出の御祝儀行はれ、春日局は御母代となりて二位に敍せられ、姫君に侍して諸

福地櫻痴 名は源一郎、長崎市の人、文學者、明治三十九年歿、年六十六。白書院 江戸城中の居間の名、上段下段の二間がある。入内 皇太后・中宮等が册立の前等に儀式を具へて内裏に入り給ふこと。

大名の拜禮を受けぬ。終りて、土井・松平・本多・青山等の重臣のみ座に残れり。此の時、御小姓こしやう組番頭稻葉丹後守のしめ斗目かみしめ上下にて出て來り、春日に向ひ、

丹「唯今國許より父上の御使として七之丞・内記の兩人御手紙を持參致し、罷越して御座ります。」

春「むう、さうで御座るか。是へ召連れて參られい。」

丹後守兩人を伴なひ來る。兩人下座に着き、

七「母上様御機嫌宜しう。」

内「お目出たう御座ります。」

春「二人とも無事でよう來ましたのう。」

七「父上様の御手紙を持つて御使に參りまして御座ります。」

春「それは御使大儀であつた。久しぶりで逢うたが、大層成人しましたのう。父上様にも御變りなく御機嫌宜しいか。」

小姓
貴人に近侍し
て雑用をつと
める役。
稻葉丹後守
春日局の長
子。



福地 櫻痴

七「益御機嫌よくいらせられます。」
春「父上の御書状は是へ持參致したか。」
七「はい、持參致して御座ります。」

七之丞、懐中の守袋の中より文を取出し、膝すり寄せて渡せば、局は押戴き、左右に會釋あひやくし、封切つて讀む文體にはつたと驚き、繰返して讀み直し、しては太息ふといきを吐き、暫し無言にてゐたりしが、仔細は何か知らねども、左右の眼に浮みたる涙は落ちてはらはら、はら、懐へくし悲みの懐へ兼ねてや、今は只わつとばかりに泣き伏せば、

會釋
挨拶する。

太息
ためいき。

丹「母上には如何なされて御座ります。」
土「男まさりの御局が其の悲みは只事ならず。」

松「仔細は如何に春日殿。」

春「いや、御心配下されませぬ。思ひがけない悲みに、つい心を亂し、はしたない體御覽に入れて面目なし。御免下さりませ。」

又もや涙にくれたりしが、何思ひけん、眼を拭ひ、身を繕ひて、丹後に向ひ、春「ちと御老職方へ申上げたき事あれば、丹後、そなたは二人の弟を連れて退座せよ。」

丹「はっ、畏りました。」

三人退座す。局は土井に向ひ、

春「大炊殿、只今俄に斯様の儀を申し出さば、心狂ひしかと御訝りも御座らうが、さがりがたき仔細御座りますれば、何卒直様此の身の御暇賜はりたく、此の儀兩上様御臺様へ御前様より御申立の程願ひまする。」

土「常々より物に騒がぬ御局が、只今の歎といひ、直ちに御暇を賜は



春日局

りたしとの御願は、なにさま仔細のあ
る事で御座らう。大炊随分御取次も
致しませうが、其の仔細苦しからずば
御咄し下されよ。某ども一同是にて
承るで御座らう。」

春「御親切の御詞、有難う存じます。今
は何を包みませう。此の春日は夫佐
渡より離縁を受けまして御座ります
る。」

本「なに、佐渡殿が御局を離縁されたとな。」

青「それは容易ならぬこと。」
土「又佐渡殿にも似合はざる短慮の計らひ、罪科もなき妻女を離縁
致すとは、餘りの事で御座る。」

春「此の上は只身の御暇下し給はるやう、偏ひとへに御取次を願ひまする。」
土「さほどまでに願はるゝもの、御取次は致しませうが、御局には恐
れ多くも從二位に敍せられ、御母代にならせられたを打棄てて、
御暇を願はるゝは、ちと御料簡が違ちがひは致しませぬか。」

言はれて局は胸迫り、又もやせき來る涙を拭ひ、

春「春日が料簡少しも違ひは致しませぬ。凡そ人の妻たるものが、
其の夫に見限られ捨てらるゝ程の恥辱は、又と御座りますまい。
先頃のこと、大御所様より、夫佐渡召抱へらるべき間、江戸表へ罷
越こす様内々申し遣はせ。」との世に有難き御上意に、飛び立つ程の
嬉しさに、急ぎ其の旨細々と文に認め遣はしまして御座ります
るが、女の恩にて立身致すは武士の恥と、二人の子供が持參せし
此の文に。」
離別を受けし悲しさは、

料簡
考、分別。

上意
君主のこ
ろ、かみのお
ぼしめし。

春「沖たぎに漂ふ捨小舟、雲井の上うへに昇るなる、二位の位は高くとも、夫に
離るゝ雁がねの、獨り行きては何かせん。五つの衣の綾錦、唐紅
の袴着て、玉の臺うてなに住まふより。」

今は春日の霞さへ、秋の野分に散る落葉、

春「只此の上は御暇賜はつて、元の姿に立返り、春の朝は疾く起きて、
粟田の山あきたのやまに薪伐り。」

秋の夕は小夜更けて、山科やまのの里に絲を繰り、

春「夫婦親子睦じう暮らしまするが春日の望、御推量下されて、土井
殿、何れも方御執成とらなを偏に御願ひ申上げまする。」

男まさりの御局も、夫を慕ふ貞節に、女となりてかきくどく、心
の程ぞ美しき。

玉の臺
りつばな家
屋。

山科
山城國。

斯かる所に、上段の御簾みすだの内に聲あつて、

將「やよ、春日。」

聞いて局は打驚き、姿繕ふ折柄に、御簾をさつと捲き上げさせ、二代將軍秀忠公御臺若君、姫君も威儀を正して坐し給へば、皆一同に平伏す。局は涙を押拭ひ、

春「はしたない體御目に留り、恐れ入つて御座りまする。」

將「常に變りし歎の體は、夫佐渡に離縁されたる故であるよな。」

春「御直に申上ぐるは恐れ多く御座りますれば、願の趣大炊其の外より申上ぐるで御座りませう。」

將「大炊、其の仔細申せ。」

土「はつ、既に御聽きに達せし上は、包み隠すに及ばず。御意の通り、春日におきましては、女の身として夫に離別を受けまするは一生の恥辱、若君様の御守役も、姫君様の御母代も相勤まらずと存じ、何卒御暇を願ひ、元の身となつて、夫佐渡に詫言致したき所存

に御座りますれば、御暇の願取次致します様に、たつて申し迫り居りまする。」

將「むう、それでは、春日には佐渡より離別の書狀が参つたと申すか。春日、差支なくば其の書狀我等に見せい。」

王謝朱門事、非城南
尚、沈舊衣、多情只
有、堂上燕、偏帶秋風、
此飛

蹟筆痴櫻地福

王謝朱門事々
非、城南尙說
舊鳥衣、多情
只有堂上燕、
偏帶秋風、
向此飛
櫻痴居士源

春「上意には御座りますすれど、恐れ多い次第に御座りますれば、
將「いや、遠慮には

春「はつ。」

及ばぬ。是へ出せい。」

將「右衛門、其の書狀讀み上げい。」

松「畏りました。」

右衛門大夫は書狀押披き詞淀まず讀み上げたり。將軍篤と聞かせられ、

將「成程、其の書狀の様子では、佐渡が女房の縁を以て立身致すは恥辱なりと存じて離別致すと申したるも武士の意地。又春日がすぐに暇を願うて立ち歸り、佐渡に詫言して元の身分になりた」と申すも賢女の操。のう、御臺所さやうではないか。」

臺「仰の通りに御座ります。春日の心中察し入りまして、先程より涙に袖を濡らしまして御座ります。」

將「さうであらう。如何なる憂目に會ふとも更にひるまぬあの春日が、左右の眼を泣き腫らし、歎に沈みて取亂したるは、これ貞婦の誠女たるものは斯くなくては相成らぬ。姫君にも能く御心得なされよ。春日がさう思ひ入つたる上は、止めても止まるま

い。望に任せ暇を遣はすにより、すぐに是より歸國致すがよい。都合次第何時でも出發致せ。是までの忠節一方ならず、秀忠満足に思ふぞ。」

春「御懇ろの上意有難う存じ奉ります。自儘の儀を願ひ、御咎をもあるべきに、身の御暇下し置かれ、御恩の程御禮申し上げます。此の上は、若君様へ御別を惜しみ奉り、後々の事ども梅の戸へ申し残り、出立仕りたく存じます。」

將「暇の願聞き濟んだる上は、萬事心任せに致せい。」
春「さやうならば上意に従ひ、御免を蒙り退座仕ります。」

馴れし御殿も今日限り、後へも心引かされて、流石の局もしをくと、御前を出でて行く所を、上にはきつと首肯かせ、

將「こりや、春日、暫く待て。」

春「はっ、御用に御座りまするか。」

自儘
勝手。

將「別に用といふではないが、ちよつと其方に引合せたい大名がある。上野、かの者を召連れい。」

本「畏つて御座りまする。」

本多は仰を蒙つて御次に入りしが、程もなく伴なひ出づる其の人は、無地の熨斗目に長上下、行儀を正して伺候なし、末座に控へて平伏す。

將「遠慮には及ばぬ。近う、近う。」

稻「はつ。」

土「上意で御座る。お進みなされい。」

稻「はつ。」

將「春日、其の大名を存じて居るか。」

局は上意に顔を上げ、

春「や、や、あなたは我が夫。」

將「是なるは大御所の御目鏡にて、此の度眞岡二萬石を與へて召抱

眞岡
下野國。

へたる稻葉佐渡守正成と申す大名ぢや。何と立派なよい大名であらうがな。」

聞いて局は飛び立つ嬉しさ。

春「え、有難う御座りまする。」

稻「春日にも御母代を仰せ蒙り、二位に敘せられ、誠に恐悦な事で御座る。」

將「お、春日、嬉しいか。いや、嬉しさうな顔付ぢや。」

と御臺所に向はせて、

將「御覽なされい、只今までの泣顔に打つて變り、春日のあの嬉しさうなる笑ひ顔、さりとほあまりの相違では御座らぬか。併し、是はさうなうては相成るまい。夫が離別の書状を見て歎に沈み、正體なき泣顔を見せたるも即ち賢女、今又夫が立身の體を見て、嬉し涙の笑顔おほほをば繕はぬも賢女、誠に春日局は賢女の鑑かたみ。秀

忠感心致せしぞ。是では暇を取つて山科に歸るにも及ぶまい
がの
春「有難い御上意恐れ入つて御座りまする。」(春日局)

新制女子國語讀本

第二修正版 卷五終

□新制女子國語讀本□



大正十一年十月廿七日 印
大正十二年一月四日 訂正再版印刷
大正十三年九月十一日 修正三版印刷
昭和二年九月二十三日 修正四版印刷
昭和三年一月十一日 訂正五版印刷

大正十一年十月三十日 發
大正十二年一月七日 訂正再版發行
大正十三年九月十五日 修正三版發行
昭和二年九月二十六日 修正四版發行
昭和三年一月十四日 訂正五版發行

著者

東京開成館編輯所

發行者

代表者 松本繁吉

印刷者

代表者 松本繁吉

發行所

東京市小石川區小日向水道町八十四番地

株式會社 東京開成館

〔振替貯金口座〕東京第五三三三番

定價 金六拾七錢

富士印刷株式會社印刷

